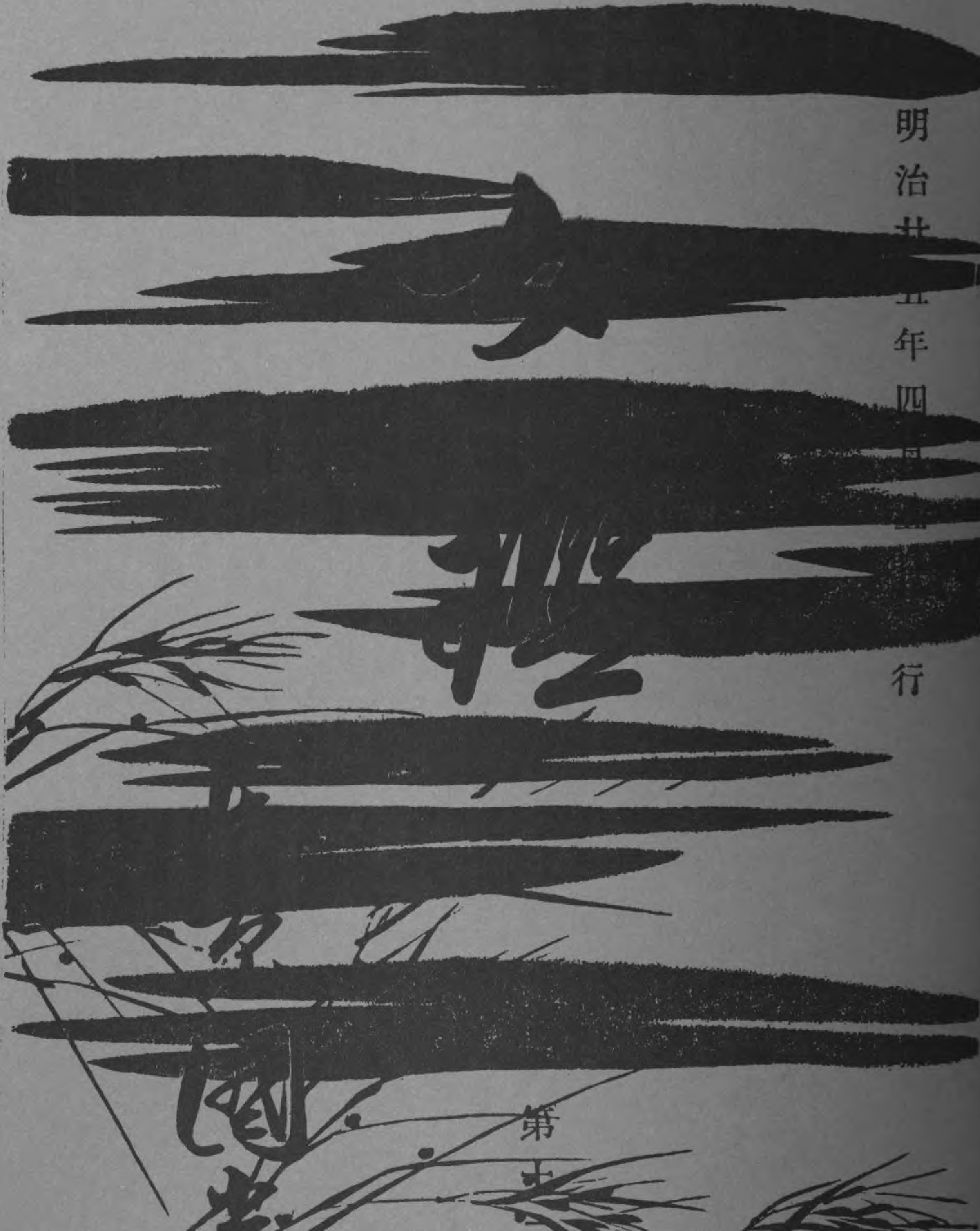


明治廿五年四月…行

第十二號

女鑑第十二號目次

黒井重乃



女鑑

高きに登るものは卑きよりす

今茲に人あり。憤然心志を起して、聖賢の地位に至らんことを願ふものあらばいかに、誰しもその志は賞すべし。然れども、聖賢とならんと欲せば、それ相應の順序あるなり。無學文盲にして、明日よりは、予は聖賢たるべしといふとも。之れを信ずる人はあらざるなり。これと全じく、完全圓滿なる婦人とならんと欲するにも、その順序はあることとなるべし。

完全圓滿なる婦人とならんと欲するには、必ずしも、高尚なる學理を研究したりとて、それにて宜しと謂ふにはあらず。風雅なる藝術を習得したりとて、それ

にて濟むといふべからず。婦人には婦人の德と、婦人の職と、婦人の知り得べきものとあり。苟、これを知らずして、如何に他の高尙、風雅の學業を覺え得たりとて、決して婦人といふ名稱は下すこと能はざるべし。然るに、世には隨分あやしくも、物數奇なる人ありて、婦人にして、その德と職と、婦人の知り得べきものとを覺え得ずして、往々他の道にはせ給ふ方々多かり。婦人は、男子を輔けて、世に立たしむるものなりとて、政治學を研究し、演說術を修業して、はては婦人にも、參政權のなきことやはあるべきといらち給ふ方あり。經濟學は、家政を掌る者に欠くべからず。生理學は、幼兒を養育するに必要なり。音學、唱歌は、交際の道に大利益あり、洋學、會話、はしかくの事に得ありとて、これ等の道にいそしみ勵ては一意他念なき方あり。政治、演說、

經濟、生理、音樂、唱歌、その他の洋學すべて、婦人に害ありとしあらがふにはあらねど、一足飛びに、婦人の高尚なる地位を占めんとし給ふ方々には、また恐るべき弊害もあるべし。方今婦人の高尚なる地位を得んとし、又は現在その地位に登り居給へる人々たち見まゐらするに、多くは、完全圓滿なる御方の少きぞ、いかゞはすべき。

事少しく卑俗に亘れども、今いさゝか實例を擧げて論はん。ある交際の道にたけ給へる婦人は、音樂唱歌はいふに及ばず。政治學にさへ長け給へる人なりけるが、或時糠袋を製し給ひて、その四隅を悉くぬひ畢り、揚々下婢に向ひ給ひて、おのれは、凡二十分の時を費さぬに、糠袋四をぬひ畢へぬとて示されたりけり、又ある婦人は、なにがしの女學校をも卒業し、其上英學を專門に、兩年の間修め

給ひて、今は意の如く洋行がへりの、ある學士の許にとつぎ給ひぬ。さて、ある時の事なりけり。下婢の風邪に冒されて、病の床にありければ、自ら朝夕の食物を調じ給ひけるが、或朝、味噌汁を調じ給ひぬ。始の程は、あまりに塩からかりければ、水をさし給ひぬ。此度はあまりに塩薄かりければ、味噌を入れ給ひぬ。然るに、又、その程をすぎて、塩強く、又、水をさし給ひぬ。鹽薄く、鹽強く、からく、あまし。はては、鍋の器に溢るゝまでになりても、其味ひの中間を調じ得給はらで止み給ひぬとぞ。あまりにおとがひを解きぬべきことにはあれど、かゝる實例は猶あまたありぬべし。

そも〳〵、婦人の當に知り得べき限りのものを務めで、徒らに志向をのみ、深遠になしたりとて、何の用をかなさん。前例の政治家、學士の夫人と仰がるゝも、

糠袋と、味噌汁とに、其本色を失ひ給へるが如くば、高尚なる學術は却りて、婦人の地位を下すが如し。故に吾人は、彼の高尚なる學術を欲せざるに非れども、婦人の地位を高むるには、その卑近のことより、高きに登らんことを希望して止まざるなり。

（未完）

和漢女訓辨

二三百年このかた、我が國の女子を教育するさまは、何事もみな完全なりとは云ひがたく。特に智育の如きは、まことにあはれはかなき有様にてありければ、中以下の女子には、伊呂波のいの字すら、正しうかくことを知らず。たまく一二に二を加へたるは四なりと云ふことを知れば、こよなき大學者とみづか

らも思ひ、人も許ししは、めづらしからぬ程なりしが、德育の一點に至りては、智育のかゝる有樣なりしにひきかへて、廣き世界にも其のためし多からぬ程に發達普及せしは、其の故なくして然らんや。昔時の敎育法はまことに簡便にて、何事も手習によりて敎へたり。第一に、文字と讀書の法とを敎へ、第二に、修身の一科も亦之によりて敎へたり。其の方法は、修身讀本の類を以て、手本となすに在りき。故に子女の手習するもの、其の左にある手本を見て、之を其の前にある草紙にくりかへし習へば、別に小學讀本を讀むにも及ばず。又修身の講演を聞くにも及ばすして、直に此れらの諸學科を學び得たるなり。さて又、其の手本となりたる修身讀本の類は、如何なる書なりしやと云ふに、女子にありては、女大學、女今川、女中庸、女小學など其の重なるものなりき。かの寺

子屋と稱へし學校にて、手習を學びたる女子は、みなかゝる敎育を受けしかば、生長の後、おのづから女大學、女今川などの敎へしさまに、身の行すべてのわざを、なすやうにはなりにたり。されど、當時寺子屋の敎育をうけしは、やゝ資産あるものゝみにて、大抵は、此の簡便なる敎育をも受くることを得ざりしが、女大學、女今川の訓戒は、歳月をふるがまゝに、甲唱へ乙和して、後には我が國の輿論となり。身みづから女大學、女今川などを手習せざりしものも、母に敎へられ、人に聞きて、又、女大學、女今川などの人とはなりにけり。且當時の書肆は先を爭ひて、女大學、女今川などの手本を出版したりければ、寺子屋に赴くこと能はずして、唯暇あるごとに、みづから手習せし獨學者の便利も亦多かりき。此れ、我が國女子の德育の、特に發達普及せし故由な

り。

先年、男女同權の妄說、世にさかりなりしころ、新聞雜誌に、まゝ女大學、女今川などの訓戒をあげて、道理にあたらずとて、いたく非難したるものありしが、其の中には、如何にもと、思はるゝ論もありたれども、多くは唯、罵詈讒謗したりと云ふまでにて、彼れらみづから道理にあたらぬ說をなしたり。當時の論者は今何處にありや。ふたゝびかゝる暴論を吐かば、ゆるすまじきを。此のごろは、形をかくし、聲をのみて、さあらぬ體によそほへるこそ笑止なれ。女大學、女今川などの訓戒は、一より十に至るまで、みな道理にあたれりとは云ふべからず。中には今日に不通の事なきにしもあらねば、これら不通の事どもと、古今かはらぬ訓戒とを區別して、不通の事どもは、其の不通なる所以を

辨じ、古今かはらぬ訓戒は、ますます之を發揮すること、今日に、其の要なしとは云ふべからざるなり。されど、かの一時の論者の如く、唯、罵詈讒謗して止むは、我が國女子の德義を害ふこと大なるを以て、識者の取らざる所なり。女子德育の書、女大學、女今川、女中庸、女小學、女四書の如き、其の類まことに多かれども、みな支那の女子道德說に基かざるはなし、故にこれらの書を辨ずると共に、支那の女子道德說を辨ずるは、其の由りて來たる所を知ることの便利、ことに多しとす。

孔子曰く、婦人は人に伏するなり。是の故に專制の義なく、三從の道あり。家に在りては、父に從ひ、人に適きては、夫に從ひ、夫死すれば、子に從ふ。敢自ら遂ぐる所なきなり。敎令閨門を出でず、事饋食の間にあるのみ。

中村惕齋の姫鑑に、能く之を釋したれば、茲にひきいで、いさゝか勞をはぶかん。人に伏すとは、人にをれしたがふ心なり。專制とは、ほしきまゝにはからふぎなり。三從とは、人にしたがふ道三つあるなり。人にゆくとは、人に嫁するなり。敎令とは、下知する心なり。閨門とは、ねやの戶なり。饋食とは、食をてうじて人にそなふるを云ふ。女はたゞ人にかゝりてある者なり。故に何事もひとりわが心のまゝにせず、をさなきほどは父にしたがひ、ひとゝなりては夫にしたがひ、老ての後は子にしたがふ。一生已が心ざしを、みづからとぐる事なし。そのはからふ事は、ねやよりほかに出ださず。そのするわざは、食をそなふることのみにあり。白樂天が詩に、人生婦人となることなかれ、百年の苦樂、他人によると、作りけるも此心なるべし。

（未完）

論説

女子高等師範學科卒業諸子に告く　椿　蓁一郎

諸子は、多年苦學の功空からす、今回の卒業試驗に及第し、不日此の校を去り、其々官命を奉して、敎育の職に就かるへし、諸子は言ふまてもなく、高等師範學科の卒業者なり、而して、又、實地敎職の初入門生なり、されは、予は諸子の行を送るに臨み、今より諸子か進行せらるへき前途に付て、注意を要すへき、一二の件を擧けて、以て贐となさんと欲す、

一國品位の高下は其の國、敎育普及の度如何にありとは、今日何人も異論なき所なり、されハ、文明諸國は皆、普通敎育制度を設け、兒子就學の義務を確定し、父兄にして故なく、子弟の就學を怠る者あるときは、或は罰金を科し、或は拘留に處す、之を强迫就學の法といふ、國に、不學の民なきを期する所以な

り、斯くいふときは、教育の普及も、至て無造作に成し得らるゝ如くなれとも、實際、さる容易の業には非す、凡、強迫の法を施かむと欲せは、之に先き立ちて、あらゆる就學の便宜と、補助とを與へ、奬勵誘導の道具に備り、而後尙、父兄たるの義務に背き、兒子の就學を肯せさる頑冥不靈の徒を制裁する法を設くへきのみ、若、然らすして、濫に法律の威力を藉り、人民を驅らむとする時は是れ苛法なり、酷律なり、怨嗟の聲は、忽、街衢に滿ち、到底其の目的を遂くること能はさるへし、

就學を勸誘する道も、亦、多し、通學を便利にするなり、開校の時刻を斟酌するなり、夜學若くは、日曜學校の類を設くるなり、學費を輕減し、特に貧兒の爲には、教科用具を與へ、場合に依りては、食物を給することもあるへし、或

は資力乏しき學區には、補助金を配附して、學校の設備を完全ならしむる等、枚擧に遑あらすといへとも、就中、其の効顯の著しきは、敎師にありとす、敎師たるもの、厚德其の身を持し、至誠子弟を導かは、子弟は恰、鐵屑の磁石に吸引せらるゝか如く、又、蟻子の蜂蜜に趣くか如く、西より、東より、群集して止まさるへし、證を遠きに求むるを要せす、現時此等の實例あるは、諸子の常に認むる所にあらすや、予もまた、久ゐく地方にありて、敎育に從事したるものなり、平素實驗する所に依るに、凡、小學にして、善良なる敎師を得れは、則就學の兒童、忽、增加し、若、其の人亡けれは、又、忽、散して招けとも來らす、恰、響の物に應するか如し、故に云ふ、就學を勸奨する途、多端なれとも、未た賢良なる敎師を得るに如くものなしと、

今、文部省第十八年報明治二十三年を取りて、之を閲するに、全國學齡兒童、就學の比例は、學齡百人中、就學四十八人九三にして、之を男女に區別すれは、男子は百人中、六十五人一四の就學、女子は同じく三十一人一三の就學にして、秋田縣の如きは僅々十人強の割合に過きす、是を以て見れは、不就學者の大部分は、全く女子にあることとなれは、就學勸誘の計も、亦、女子に付て最も考究せさる可らす、我か國に於て、就學督責の規則を行ふ事久しと雖も、未た強迫就學の制を採らす、されは、此の無數の不學兒童は、何によりて、教育を受けしむへきか、方今、教育の職にある者、また勉めすして可ならんや、まして、女子教育の責を擔ふものに於てをや、諸子須らく去りて、實地に就て考究すへし、女子の就學を妨くるは何にありや、何如せは、便ち其の妨礙を除却し得へきやを、

必、種々なる問題は、腦底に彙集し來りて、之か材料を供給すへし、左に述ふるハ其の一端に過ぎず、

（未完）

女子宜しく德本を養ふへし　前川弘一郎

凡そ女子の性は柔なり。故に古より婉嫕淑順を婦人の美德と云ふ。然れども是唯其常に行爲に形はるゝものよりして之を云ふものなれば、若し之れが根本たるものなければ、其美德を常にすること能はざるなり。何をか其根本と云ふや、曰く貞の一字是なり。易にも婦は貞なれは吉といへり。婦女若し婉嫕を欲して貞ならざれは、其弊や嬌艶にして恥なきに至らん。淑順にして貞ならざれは、其弊や恥を忍び辱を受けて辞せず、苟も性命を全うして畢世の大辱を受くるに至らん。是

蓋し其の本の立たざるか故なり。然らは則ち美德の末葉たること豈に明かならずや。されは假令ひ容色なくとも、艷嬌ならずとも、其心志を正しくし、貞固ならは、所謂美德は自然に其身に備りて離れざる也。故に古語に曰く貞は事之幹也と。是に於て貞の一字、信に修身の根本たることを知るべし、然るを其の末葉たる美德をのみ研究して、其の本根たる心を貞正にすることを務めざるものは、所謂無源の流、無舵の船と同じきのみ。いかにしてか、其身心を修め、其美德を全うすることを得んや。斯くして女子の本分を盡くして、國恩に報ぜんと欲するは亦た難からずや、亦た過たずや。

貞とは、正直にして不偏、悠久にして不變なるを謂ふ。凡そ生を人間に禀けたるものは、必ず離るべからざるものなれは、人たるものは男女を論ぜす、古今を問

はず、必ず修めざるべからざる美德にして、據らざるべからざる通義なり。乃ち吾邦の所謂敷嶋の大和心とは、乃ち貞の代名詞なり。故に人の一生の間、事を處し、變に應ずるに方りて、道に悖らず義に背かず、人間の本務を果すもの、皆な貞の德なくしては能はざるものなり。されば、又た久しき也とも、恒なりとも、義解せらるゝなり。斯く終始を一にし、節操を正しくするは、信に貞の實德なれば、婦人女子の行ふべき所の大經大本なるもの、豈に亦た此より外あらんや。

さて婦人は人に從ふものなり、故に益々貞ならざるべからず、貞ならざれば、遂に其德を二三にし、其行を敗亂して、從順の美德を保つこと能はざるなり。且つ婦人の人に從ふを貴ぶ所以のものは徒に優柔婉娩の資を飾るにあらず、其の本分を遂るが爲なり。凡そ婦の夫に事つるは、猶臣の君に於けると一般にして、乃ち

義に依り禮を履みて、人間の大義務を果さゞるべからず。是故に從はざれは相和すること能はず、和せざれは順ならず、和せず順ならざれは、いかにしてか、戮力して相共に事を爲すことを得んや、是尤も見易きの理なり。故に男女同權の妄說行はれて、男女益々相和合せず、遂に尊卑、有別の敎廢れて、人倫敗缺し、四個の美德も之れが爲めにすたれて、貞正の道滅するに至らんとす。近來女子敎育の論盛なりと雖も、異論紛々其要を得るもの蓋し鮮し矣。世人未だ歸着する所を知らざるなり。故に或は奢侈淫佚に失するものあり、或は驕傲暴慢に陷るものあり、或は又輕佻浮薄に流るゝものあり。口に學說を巧みにし、手に技藝を妙にすと雖も、旣に女性の本分を失ひ、女道の大要を知悉せざるものは、たとひ其の失する所同からずと雖も、其身を毀傷し人倫に悖叛するは則一なり。

世の人の妻となり、人の母たるものをして、皆な斯の如き不具の人とならしむるもの、亦た痛歎すべきの至ならずや。

余れ嘗て以爲らく、是れ道德の敎育を緩にし、技藝の末に區々として、其の心性の横奔を拒がざるの弊なり矣と。道德とは何ぞ、人の人たるべき道、人の人たるべき德を云ふ。父は父たるべく、母は母たるべく、夫は夫たるべく、婦は婦たるべく、皆各其の道理あるものなれば、之を研究して明に其義理の當然を知るを、學問の本體とするなり。人は世上の用務をなす爲めに生たれば、先づ第一に人事の規則を知ることこそ肝要なれば、道德の敎を忽かせにするは、之れ人たることを求めずして、強て異類に交らんとするものなり。故に詩歌音樂手工の末技に至つては、尤も人事の急なるものに非ず、若し餘力にて之を學ぶは可なれど

も、決して之を以て女學の本体、女子の本務とはなすべからず。古より婦人は、其心の勝れて正直なるを貴とぶは、則ち心は万事の起る本なれば、心性の涵養其宜しきを得て、眞に道理の當然を辨へざれば、女子の本分を盡しがたきを以なり。

或曰く、女子の務ハ朝夕庖厨の事より、織縫の用に至り、家政の調度、子弟の養成に在るのみ、固より外事に關せず、世事に通ぜずして可なり。と之れ蓋し未だ其要を知らざるものなり、何となれば、人事の大本たる大道の要を聞かざるも可なりとするものなればなり。

女子亦た人なり、豈に人道を知らざるべけんや、故に君に忠、父に孝なるべき義を知らざれば、技藝に達すとも不學の人なり、文彩ありとも愚昧の人なり、固よ

り人の妻となり、人の母となり、一家を治め、子弟を育することと能はず。苟も婦人にして家事を理し、庭訓を施すと能はず。施して其要を得ざるものは、同じく之れ人間の大義務を知らざる、野蠻禽獸に均しきのみ、豈に人間の恥辱に非ずや。

是故に婦女の學問に於ける、尤も倫理を明かにし、道德の要義に遵ひ、人たるの大義を愆らず、女子たるの道を失はず、貞正の德中に滿ち、確然として變ずることなく、婉娩の容外に形はれ、端正の行、事爲に發すれば、邪僻何ぞ得て之を犯さんや。

若し不慮の變禍に遭ふことあらんには、從容として義に就き、唯道理のある所に其身を委ね、少しも狼狽することなかるべきのみ、是れ學問の効によりて、安心

の地位を得る所なれば、死すとも悲むに足らざるなり。即ち貞の光も大なるものなれば、之を義勇の氣と云ふなり。

抑吾邦は古來尙武の邦と稱して、義勇の行は人民一般の習性となりたることなれば、古來烈女貞婦の、美名を天下に擧げ、後世に傳へたるも亦多し、就中天鈿女命の、猿田彥神の如き勇壯なる人に、獨り對面して大事を決したるが如き、息長足姫尊の征韓の如き、楠母の正行を訓誨して、終に忠孝の人を成したるが如き、瓜生保の母が子弟の死を悲しまずして義治を慰め、軍氣を振しめたるが如き、山名氏清が妻の、其子の父難に殉せざるを責めたるが如き、其他實に枚擧に暇あらず。吁、是實に我が大和心なるものにて、外人の及ばざる所なり、彼の鄭芝龍に從へる、肥前平戶の娼女すら、尙ほ身を潔くし節に死して、清兵を驚かした

るに非ずや。されば吾が　神州の婦人女子たらんものは、皆な宜く　神聖の立て給へる、忠孝の教に從ひ、益々貞正の操を固くし、古人の義勇を鑑みて、自ら其の勇氣を養ひ、平居には禮を重んじ、行を正しくし、婦人の本領たる、婉嫕淑順の美德を汚すこと勿れ。

史談

黑井繁乃の事を記す

竹野節雄

繁乃は、上杉氏の家臣、黑井四郎左衛門といへるが一女なり。文化元年七月、出羽國米澤袋町に生る。七歳の時、父を亡ひ、其の母ひとりの手にて養育せられぬ。成長の後、母、同藩士なる湯野川某の三男源三郎を迎へて、繁乃に配し、家を嗣かしむ。文政六年七月、男子を設け、これを信藏と名づけ。(後小源太又繁邦と改む)其の年の十一月、夫源三郎ふと病の床に臥しけるが、日に日におつくなりゆきて、つ

ひに皈らぬ人とぞなりける。繁乃は、今年僅に二十歳、いと貧しきが上に、家族とては老母と幼兒との足手まとひのみ。其の當惑はいかばかりなりけん。なみ〳〵の女なりせば、氣沮み、心も狂ひぬべけれど、繁乃は、歎きこそすれ、屈する氣色は露だに見せず、晝夜羽織の緒を組みて賣しろなし、あるは糸繰などの賃仕事をなして、老母を養ひ幼兒をひたしけり。かく孝養慈育することと、年を積みて懈ることぞなかりしかば、近きあたりはさらなり、遠き里人までも聞き傳へて、ほめたゝへぬ者はなかりけり。信藏年七歳となるに及ひ、隣家に住まへる粕谷といへる翁に就きて、四書の句讀を受けしむ。されば、繁乃は、貧しき中に生ひ立ちて、別に敎育とて、受くる事もあらず。わづかに假字を知りて、日用を足すのみなりければ、信藏の家に還りて、復讀する時、誤あるも訂すこと能はず。遺忘あるも補ふこと能はざりき。さて、自思へるは、徒にはたりて復習せしむとも、一字を敎ふるとあたはずば、何かせん。中々に幼兒の心をそこなひやせん。やうこそあれとて、信藏の隣翁の許に至るごとに、繁乃は紙筆を携へて出で、其の窓の下に立ち、咿唔のまに〳〵假字もてかいしるし、還れば必ずそと引き合せて、復習せしめき、かくすることと二とせ

ばかりにして、つひに四書全部を寫しをへぬ。世の中に、おもひやれども、子をこふる、思ひにまさる、思ひなきかな」誰しも、親として、其子を思はぬはあらざるべけれど、かく心を盡せる事の細かなるは、例まれなりといひつべし。その後信藏藩校興讓館に入りしが、志ます／＼しく、操いよ／＼かたく、數年一日の如く勉め勵みしかば、學業大に進み、藩主より黃金若干を賜はりて、特賞せらるゝに至りたり。母のかいしるせるかな四書、今は用なくなりぬ。然はあれど、一字一句、皆、母の精神のこもれるものなり。徒に壁をはり、障子をつくらふは心ならずとて、其の遺編を請ふ。母の曰はく、女の拙き筆のあと殘し置きなば、かへりて後の人の笑とやならむ。汝、母の耻をな露しそといふ。信藏、强て請ひ受け、綴り輯めて、國字四書と名づけ、叙を付して子孫にのこせり。嘉永六年、繁乃病にかゝり。其の年の八月、遂にみまかりぬ。年五十なり。繁乃、幼時容貌ことに美しかりしが、中年以後、頭髮全く白く、齒牙の存れるもの、殆、稀なりき。こは其の苦心勤勞の尋常ならざりしによれるなるべし。この時、信藏學業やゝ成れりといへども、いまだ志を得ずして貧しさは昔に異ならず。月に一回登城して當番するが例なるも、こ

の時用うる紋服は、常に典舗にありて家にあらざりし程なりき。さるに繁乃は、當番の前夜必ず密に償ひ還して、用をかゝしめざりしかば、信藏は露知らで過ぎたり。又、こを償ひかへす前は、夜を重ねて眠につかざりきとなん。かゝりければ、信藏の嘆大方ならず。後擧られて、職に就き、年毎に昇り進みて、忽ち重き職に任せられ、維新の後、米澤の少參事を拜して、其の身を終へしが、常に母の艱難を心とし、自奉ずる事極めて薄く、吹煙、茶、酒を用ゐず。吉事ある毎に、國字四書を戴きて、其恩を謝したりとぞ。

古歌にも、おほし立てし親なかりせは、いかにして君の惠を我はうくへき。と信藏一歳にして、父を亡ひ、貧しきうちにひとゝなりても、身を立て、功を奏したるは、全く其の母の訓陶によれるなり。あはれ今の世は、學の道、開けに開けて、和漢の學はさらにもいはず。遠き西洋の學の術をさへをさめたる才媛賢女、濱の砂の數よりも猶は多かれば、かばかりの事は、我にもなど思はすかたもありぬべけれど、思ふ事は云ふよりやすく、行ふことゝ云ふよりかたし。ようし給はすべ、かへりて學ばぬものに、おとり給ふ事の出來なんかし。

烈婦はつ女の小傳（承前）

井上頼文

さきに甘眠隨筆といへる書より、烈婦はつ女か行實をぬきいでゝ、こゝにのせたりしが、今又屋代輪池翁が、この烈婦の行實をめでゝよまれたる歌を、同し書の中より見いでたれば、さきの傳のつゞきとして、こゝにのせつ、

一たんの勇氣より猶年來の貞節こそはまさりけれしもつけの國あしかゞのこほりの内に川崎の村の農民逸八が後家のはつこそ人なみにすぐれしものときこえたれはたちになりし時とかやよめ入しつゝあくるとし男子をまうけその名をば勘彌と名付寵愛すしかるに夫逸八は風のこゝちのおもりつゝいまはのきはのひと言はもしも醫藥のしるしなくこの世をさらばはつくさのわかき身なればしかるべき人にもそへといひければうらなくものをのたまふよさらぬわかれのありともいかでをつとの家をいづべきやいはんやしうとしうとめのおはするうへにこの子さへかくてしあればとにかくにもりたて家をつがせんとか

たくちかひて　わかれしが　それよりこのかた　十とせあまり　ひるはひめもす農桑に　身をくるしめて　はねをゝり　よるはよすがら　いをやすく　ぬることもなく　老ひとに　つかふるかたて　勘彌をも　をしへそだてゝ　としをへぬ勘彌が四に　なりければ　しうと勘右衛門　いふやうは　もはや乳房を　はなれても　そだちもすべし　その方は　外に縁をも　もとめよと　ありし時にも　逸八に　ちかひしごとく　いなびつゝ　朝なゆふなに　つかへきて　をこたるひまはなかりけり　かゝりしほどに　勘ゑもん　中氣をやみて　こしたゝず　かてゝくれへて　老ぼれて　ひるはひめもす　ねてくらし　よひあかつきの　わかちなく　めさむる時を　あさといひ　食をこのめば　こゝろよく　そのたび〳〵にすゝめつゝ　今しも箸を　おきぬれば　又も食事と　このむをも　さらにうむいろ　みせすして　しづのをだまき　くりかへし　むかしを今に　すがのねの　ながき年つき　つかへけり　またある時は　飛騨たくみ　うつ墨なはの　すぐなるも老のむかしの　わざなれば　見つゝこゝろを　なぐさまば　病をやしなふ　こともやと　ちかきわたりに　はしらたて　棟あげなんど　きくときは　やみはゝけた

る　老人を　せなにかきおひ　つれゆきて　こゝろゆくほど　見せけると　きくも
めでたき　老人かな　又ある時は　佛神に　祈誓をかけて　よな〳〵は　水ごり
かきて　すあしにて　やまひをいのり　かくばかり　こゝろのまことを　つくせし
も　そのかひなくて　寛政の　とらの年にぞ　身まかりし　七十七とぞ　きこね
ける　をつとにおくれし　ときよりも　としのみつぎは　さらなりや　醫師の禮式
佛事の施物　いへにつきたる　つとめさへ　ひとつもかくこと　なかりしは　み
なこのはつが　わけくれの　手つくりとこそ　きこえつれ　勘彌いちゝの　なき子
とて　あなづられては　家たゝずと　ことさらこゝろ　もちひつゝ　やしなひそ
だてし　かひありて　てならひなども　ひとよりは　よくおぼえつゝ　かはなみ
の　たちゐふるまひ　行儀さへ　にうわものとて　はめらるゝ　はつは女の　か
ゝみなり　勘彌はわらべの　かゝみぞと　村の内外に　いひつたへ　ほまれをえ
つる　をりしもあれ　いかなるすくせの　ちぎりにや　ことのしもつき　二十日
あまり　六日の夜　みどりのはやし　かげしげく　はつが家をぞ　うかゞひける
はつは勘彌に　そひねして　すこしまどろむ　そのひまに　いかでかしのび

いりにけん　二人(ふたり)のをのこ　うちうへを　しかとおさへて　うごかせず　ひとりのぬすびと　おしいれの　衣類(いるゐ)雑具(ざうぐ)や　わきざしの　かたなをうばふ　ものおとに　おくにいねたる　しうとめの　こゑたてければ　そやつきれ　物(もの)ないはせぞと　わめくこゑ　はつきくよりも　たへかねて　たゞしうとめを　きらせじと　おもふ念力(ねんりき)　まさりつゝ　大(だい)のをのこの　おさへしを　すそよりぬけて　とんでゆき　しうときらんと　するところを　しつかとらへて　はたらかせず　このいきほひにや　おそれけん　ふたりはにげて　かげみえす　おさへられねる　ぬす人(びと)は　身(み)をのがれんと　けつふみつ　せどのはひりの　あたりまで　十間(けん)ばかりぞ　ひいてゆく　もちたるやいばを　うちふりて　きりてもつきても　はなさずして　はつはかぎりと　こゑをあげ　ひと〳〵いでわひ　たまへやと　よばゝりぬれば　ちかどなり　なにがしくれがし　おりかさなり　なんなくとらへ　おはせたり　はつは十ところ　てをおひて　いきたえなんと　しけるを　ひと〳〵いたはり　やしなひて　いのちにつゞかなけれども　うまれもつかぬ　かたわにや　なりもぞすらん　あらたまの　としつきへぬる　みさはより　ますらをにだ

にまさりぬる　いさましかりし　はたらきを　わがおほぎみに　きこえわけ
文化といへる　四とせのはる　小判のこがね　五十兩　もちつたへたる　三石餘
諸役免除の　つくりどり　たぐひまれなる　恩賞に　馬うしなひし　おぎなさへ
おもひいでつゝ　しかすがに　かみなかしもの　ひとぐゝも　これをかんせぬ
ものはなし　みどりのはやし　しらなみも　ならぬめぐみの　たまものは　すゑ
のよまでの　さかへみすらし

右烈婦假名略歌は屋代太郎みなもとの弘賢撰するところ文化四とせの秋八月宮もと氏萬作に請ひてうつさしめしかしてこゝに附す　ひろゆきと見ゆいとおむかしきしわざになん

家政

育兒小言（十一）

武谷水城

分娩後の心得方(續き)

浴みも濟み衣服も着せ終らば、ぬるき湯に砂糖を少し加へて呑せ、口中と咽頭とを清潔にし、其後母の初乳を呑ますべし、生れてより凡そ五六時を經る時は、小兒は空腹を覺るものなれば、此時をはかりて、初めて乳を呑ましむるを宜しとす、此母の初乳は、黄色にして濃く、嬰兒の胃腸を清淨にし、腸中にある汚穢物を下す力あるものにて、嬰兒の爲には實に天然の良藥也、之を「コロストルム」と稱へ、別性の乳汁にして、凡そ一週日を經る時は、始めて白色本性の乳汁と爲る、其味牛乳より甘く、腐敗遲く、營養の力至大なり、

產婦の中には、產後乳汁の容易く分泌せざるもの有、然る時は小兒をして、屢乳頭を含ましむべし、若し如何樣になすも出ざる時は、時を定めて薄き牛乳を與へ置くべし、但母乳あるものは與ふべからず、

嬰兒の初て生れたる時、五香抔と稱へて、種々の藥を與ふるは、無益の事のみならず、却て害を招くもの也、小兒生後數日にして死するものあるは、多くは此等の藥の爲に、腹を傷ふに因るなり、

嬰兒出生後の体温は、多くは攝氏三十八九度の間にあるものなれ共、半時乃至一時

間を經れば、常度若くは其以下に降り、十二時乃至三十四時の後は、大人と同く一定の間にあるもの也、故に小兒を臥さしめたる室内は、寒暖共に度に過ぐべからず、冬の間は常に華氏六十度位なるを宜しとす、此間小兒は常に外氣に感せしめぬ樣注意すべし、

胎髪は剃るべからず、生れたる儘に爲し置くべし、

總て初生の兒は、無我無心のものなれども、飢ゑたる時、又は身に痛み不快あるときは、直に泣くもの也、故に母親は能く〱注意して、其泣きの原因を探索して、其求る處を察知し、懇に其手當を爲すへし、此の如き時母親の不注意に依りて、小兒の不幸を招く事少からず、

產後凡そ十二時乃至十六七時間を過れば、產婦の苦痛褪消するも、勤めて身を動すべからず、二三日を經るも或は寢床の上に坐し、或は自ら室内の用事を達すなどの事を爲すべからず、此時は血の環り未だ故に復せぬ故に、强て身を動かす時は、長く血行の機能を傷ひ、身の健康を害し、虛弱の身と爲り易し、然る時は一身の不幸に止まらず、其不健康にして虛弱なる母親の乳汁にて、生育したる小兒も、亦爲に

一生涯虚弱病身と爲る也、獨逸の有名なる醫士の説に、産後三週間は一歩も動く事勿れと云へり、されども經驗ある説に依れば、凡そ十四日を經れは、毎日二三時間寢床を離れて、靜かに家事を營み、其後凡そ二週間を經て、外に故障無れハ、初めて常に復すへし、

産婦平常に復する時は、衣服を温かにして外氣に感せぬ樣に爲し、初めて家の外に出る時は、天氣の快晴なる日を撰ひ、風雨又は寒き日は外出爲べからず、之に反して、長く一室内に閉居するも惡しゝ、適宜に外に出新鮮の大氣を呼吸すへし、

總して小兒を乳養する中は、凡て懷妊中と同く、心を和け氣を平かにし、思念行爲を謹むべきは云ふまでも無く、身の養生を大切に爲し、飲食を節し起居を愼む等、懷妊中の心得に等し、又妄りに下劑又は催眠藥などを用ゐるべからす、母には十分應せぬ中に、忽ち小兒の瞑眩を來して、大害を招く事あり、凡て母の養生宜からざる時は、乳汁惡質に變して、小兒の体育上に大害を爲す、

乳養の事

小兒は絶へず成長爲ざるべからざるが故に、消化の機能大人よりも盛なるもの也、

故に大人よりも屢々其食物たる乳汁を與ふべしと雖、是を與ふるには、時と分量を定め、決して妄に飲ますべからず、泣けば飲ませ、眠りを醒せば飲ますが如きは、宜しからず、初生の兒は大凡晝の間は、二時間毎に一度宛飲ませ、夜るは十時又は十一時に飲せ、それより翌朝の五時又は六時迄は、決して飲さぬ樣に慣しむべし、其一度の時間は大約十五分時間なるべし、四ヶ月を經る時は三時毎に一度と爲し、九ヶ月に至れは四時間毎に一度と爲すべし、其時刻は午前五時九時幷に午後一時五時の四回と、夜一回九時に飲ますを宜しとす、兎角小兒は夜中目を醒して泣叫ぶこと有ものなれども、必ず妄りに乳を飲すべからず、但し餘りに強く泣叫ぶものは、他に元因のありて泣くに非ざるやを、能く探索すべし、

此く時間を定ると雖、小兒能く眠れる時は、時來るも强て醒すべからず、自然に眠醒て後に飲すべし、又乳を飲みながらに眠らしむべからず、口內に含みたる乳汁酸敗して害を爲す事あり、又母親は乳を飲せながら、自分眠る事を決して爲すべからず、乳房にて自然に小兒の口鼻を壓し、窒息して死することあり、假令自分眠らずとも、何心なく乳頭を小兒の口に含ませ、爲に此害を招く事、世間にまゝある事な

れば、必ず指先にて乳房を押へ、小兒の呼吸を妨げぬ様に爲して飲ますべし、乳房は常に清潔に爲して後飲ますべし、又臥しながら飲ませ、或は歩みながら與ふるも良き事に非ず、

乳を飲ませたる後は、暫く小兒の身体を動かすべからず、直に之を動かす時は、消化の機能を妨げ、病の因と爲る事あり、又乳を飲ませて後直に浴みせしむべからず、浴みて後直に乳を飲ますも亦害あり、共に暫時の後に於てすべし、

出生後凡そ八ヶ月の間は、乳汁の外に決して他の食物を與ふべからず、是を與ふる時は、種々の病の因と爲る、凡て小兒の胃は軟弱にして、些少の誘因にて忽ち傷ひ易く、且大人の如くに食の度合を自ら知らぬものなるが故に、獨り食物のみならず、乳汁と雖其分量を過す時は、忽ち胃に鬱滯し酸敗して、痙攣其他の病を興し易きものなり、青便、吐乳は多くは乳の過用に依て來るもの也、愼で前の時間と分量とを違ふべからず、

母親の乳汁少き時と雖、妄りに他人の乳を飲ますべからず、已む事無れば、薄き牛乳を適宜に與へ、或は身体强健にして怜悧なる乳母を雇ふべし、母親非常に虛弱に

して貧血なるか、或は病氣などある時は、乳汁は出るとも、醫士に協りて乳母を雇ふべし

（正誤）前號野村認東子著傳中「賢き邊り」は「畏き邊り」の誤、又育兒小言中「用う」とあるは、總て「用ゐる」の誤、又「經う」は「經ひ」の誤

禮法　有住齊

冠婚喪祭は、人倫の大禮と、昔より言習はせる中にも、最ゆるかせになし難は婚禮なり、然るに開化の世となりては、故實と言もの、迂遠と嘲りて、思の外に野蠻なるあつかひするもの、出來れる故に、決して欠べからざる、大要を抜萃して、禮容の重き事なるをしるしたり、まづ萬事に順序の立たざるハ、行ひがたきものなれば、媒人の心得よりはじめて、結納の一事をもつて發端とせり、其の他里出、嫁迎へ、祝盃、聟入、舅入等の諸事に至りては、追々しるすべし、

一婚ハヨメトリ、ヨメイリなど訓す、古惟昏字なりしを、婦を娶るに黄昏之時を以てするが故に、後人女を加て婚とせり、是陽往陰來之義と云、又ヨハヒと訓する

は、呼合の略語也とある人いへり、婚姻と唱るは、妻の父を婚と云、婿の父を姻と云とありて、白虎通には、婦人因レ夫故姻と云とみゆ、嫁娶の嫁はユク、トツグ、娶はメトル、ナカダチ、嫁を取る也、問レ娶媒也とあれば、婚姻には必媒による事なるを知るべし、娉と云もメトルとよめり、

一媒は中人にて、嫁婿の間にありて、結緣をせしむるものゝ稱なれバ、又はし渡しとも云、神代の故事によりたる名にて、柱わたしの略語か、はた天のうきはしを渡しそむる人と云義にて云なるべし、此媒は婚嫁に必要の人なれは、苟且にも虚飾を云べからず、其心得は双方の種姓、家格を考合せ、相比適する良緣と思はゞ、双方へ往むかひて、平生見聞にある通り、嫁の容儀より、氣質年齢等を演舌し、又婿方の事も、委細にはなして、財産の有無などは、あながちにいはず、もしたづねられたる時は、よく他にとひもとめて告べし、今の世には、婦の容貌と財産の多少を第一とすれども、人の天運は常時より知るべきにあらず、容貌の事は第二にありて、心の美醜はあらはに知るべからず、家の爲、老親の爲等になるべき、氣質ならバ、こよなき財産なるべし、又技藝の長短も、見聞の儘、つくろはず告

べきなり

一婚嫁の年齢は、まづ大寶令にみえたる如く、男年十五、女年十三以上、婚嫁をゆるすとあるに據るべし、他邦の書には、三十にしてめとり、二十にしてよめ入す、又十六にしてめとり、十四にしてよめ入すともあれど、本朝の禮にはあらず、それもこれも、異なる如くみゆれど、只早晩の素性にもよる事なれば、定めも色々心々なる也、

一結約の口上すみたれば、双方の親屬書を取かはし、又結納の時日を、婿よりささだめて言おくる事也、是等も皆媒のさし圖によるべし、

一結納はたのみとも、ゆひいれとも、昔よりいひしなり、漢土にては納徴と云、たのみとは、親とたのみ、よめとたのみ、つまとたのむの義なり、ゆひいれのゆひは、神代紀にうきゆひと云、ゆひと同ド事にて、むすびかたむるよしなり、されば結納のすみたる上は、お互に夫妻の服忌をうくるの公法あり、是は婦の親、兄、又に對して、婿の方よりおくる法あり、祝物は時代にもよりて、たがひもみえ、鄕里の風習もありて、一がいに定めがたしといへども、都合によるへき物として

は中々に不便なるべし、それ故從來の法を斟酌して、上中下三段に區分したつるものなり、其身相應の分限を守りて、おごりにならず、また粗略にならさるを、思ふべき事なり、

婦への進物

上等七種　小袿一重　袴一腰　帶一筋　末廣一對　茶一折　(是は西國の風習によるなり、)　鯛(或は鯣)一折　樽一荷

中等五種　小袖一重　帶一筋　茶一折　鯣一折　樽一荷

下等三種　帶一筋　鯣一折　樽一荷

右の外猶一層の略には、祝物代として金銀にて、贈る事もあるなり、

舅への進物は

袴地一卷　雉子一双　樽一荷

中等は雉子を鯛、鯣にかへても、又は省てもよし、

下等は扇子一對　樽一荷

姑への進物は

眞綿一折　鯉一折　樽一荷

中等は、鯉を鯣にかへても、又白髪麻一折にしても、又省てもよし

下等は白髪麻一折、樽一荷

親屬へ

男方へは　扇子一對

女方へは　白髪麻一折

右装飾を加へ、紙に包、臺据にして、それ〳〵一人別に目録を添べし、此目録は竪目録にても、横目録にても、隨意たるべし、

此包形臺積の巨細は、類聚婚禮法式に詳記して、不日發兌する見込なれは、爰には省けり、

進物の使には、婿の家扶を遣すべし、衣装は小禮服なり、中等以下は、近親の内にて取扱も難なし、此時は羽織袴にてもよし、下等に至りては、媒のものを依頼て、取結事もあれど、甚略儀なり、其時は厚く媒に謝すべし、

右の使入來の時、開門して使者を一ト間に通し、茶菓をすゝめ、家扶出て應接し、

當日を賀す事なり、さて進物を手目錄に引合せ、受授し畢て、奧へはこび入、舅姑に披露し、やがて使者を奧に案內して、舅姑及新婦とも對面し、酒杯を出して、引出物すべし、(品にても文目錄にても)此品物の多少は定法なし、家格によるべし但一旦使者退座して後、家扶出て錄を渡す事もあり、其時は祝物の持夫、及宰領等まで、酒料として持出、使者の手元へ渡すなり、

一婦家にても、かねて用意したる祝物、帶以上を省たるを、前條の使者開くをみて、答禮あるべし、萬事は前條の如し、

一結納の目錄は、竪目錄とて、奉書紙二枚重にして、六ッ半にたゝみ、白木臺に据べし、

上等

ゑし上

小うちき	一かさね
はかま	一腰
おび	一すち
末ひろ	一對

しん上

小袖	一かさね
おび	一すち
茶	一をり

茶　一折
たひ　一折
たる　一荷
い上

下等

しん上
おび　一すぢ
するめ　一をり
たる　一荷

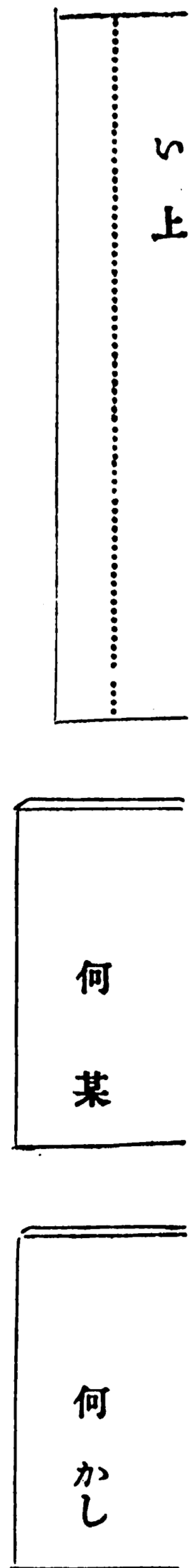
するめ　一をり
たる　一荷
い上

舅

進上
御袴地　一巻
鯛　一折
御樽　一荷
以上

姑

しん上
眞わた　一折
たひ　一をり
御たる　一荷
い上



横目錄は紙一枚、二ッ折にして竪三ッ折也、

如斯男女打交りたるには、眞名假字取まぜて書事、昔よりの法也、進上以上は品書より半字上り下り也、舅姑へは婿の名を末に書事あり、

一手目錄、及口上書等、左の如し、但本書紙二ッ切を繼たて用べし、口上書ハ一枚紙を二ッ折にして、裏白にすべし

記

舅名
　様へ

一 御袴地　一巻
一 鯛（雉子にても）　一折
一 御樽　一荷

奥様へ

口上書

今日就吉辰

御息女──様へ御縁組爲御治定御結納品外紙目錄之通御祝ひ進之候幾久御結納相成度旨御口上仰含候也

月　日　使者名

一　眞線　一折
一　鯉　一折
一　御樽　一荷
御緣女樣へ
一　御小袿　一重
一　御袴　一腰
一　御帶　一筋
一　御末廣　一對
一　茶　一折
一　鯛　一折
一　御樽　一荷
一　白銀何兩　御局へ
一　白銀何兩　御介添へ
一　白銀何兩　惣女中衆へ

以上

月　日　使者名

家内衛生（十一）　三笠舍主人

飲料の續き

酒の種類數百種に下らず、其主なる性分は、皆「アルコール」にして、此ものを含む量の、多少に依りて、酒に種々強弱の別あるなり、就中、數種の燒酎は、最も多量の「アルコール」を含むものにて、人の健康、及品行を破壞する、飲料の最たるもの也、洋酒にて「リキユール」と稱ふる美味の酒は、燒酎に砂糖と一種エーテル性の油を混じたるものにて、性甚酷烈なり、「ブランデー」も亦「アルコール」分強し、泰西にては主に下等人民の用ゐるものなり、

葡萄酒は、酒類の中にて、最も善良なるものにて「アルコール」分を含む事少く、害少き事、酒類中此右に出るもの無し、適宜に用ゐれば、食慾を進め、血行を催し、身体を強健にす、故に病後衰弱未だ復せぬもの、貧血性のもの、又老人など、適宜用

ゐれば、大に効有、故に葡萄酒は、日常缺ぐべからざる貴要の一薬品とす、葡萄酒は種類多く、贋造品多し、其の筋の撿定濟の證標あるものに非ざれは、用ゐるべからず、

麥酒は、「アルコール」の量最少く、弱き酒にして、歐米各國にては、一般に飲用するもの、我國人の茶を用ゐるが如し、透明にして苦味強からず、酸味なく、又他の不快の味なく、盃中に注ぐ時ハ、無數の小泡を生じて、容易に消散する事無く、之を飲みて、適宜に精神を興奮し、身の温を増すものを上品とす、少しにても酸味あるもの、及不快の味あるものは飲べからず、胃腸を傷ひ、下痢を興す、麥酒も亦贋造品多し、注意して撰用すべし、

本邦常用の米酒は、上の二種よりも、「アルコール」分を含む事多く、其性強し、其利害は前に述置しが如し、

咖啡は、歐米各國にて、多く食後に用ゐ、近頃本邦人も一般に用ゐるに至れり、其主なる効分は、「カフェイン」と名くる者にして、此もの興奮の性あり、故に咖啡は殆ど「アルコール」性飲料に似て、之を用ゐれば、血行を進め、運營を能くし、精

神を活潑にし、且腸胃の運動を盛にするの効あり、故に衰弱の人なども用ゐて、最も良し、過飲する時は眠を減じ、或は全く不眠を興すに至る、
茶は近古本邦人一般に、日常の飲用と爲す、其性分は「ティン」と名るもの、及「タンニーン」と唱ふるもの、其他油質等を含む、適宜に用ゐれば、精神を爽快にす、過用、特に抹茶の濃きものを過用する時は、神經症を興して、眠を減ト、或は慢性の胃病を誘起す、日常用ゐるには、極て稀薄の煎茶を良とす、夜間臨臥前に茶を飲むべからず、
(附)煙草は、食物にも非ず、又飲料にも非ず、只一の嗜好品中に算入すべき贅澤物なり、其性分中「ニコチン」と名くる毒物を含むも、此もの幸に火に逢て、消散する故に、煙草を喫するも、其傚害を被るに至らず、一度煙草を用ゐる慣習を爲す時は、再び廢する事極めて難し、され共、最初慣れざる間は、胃及神經系統を刺戟して、其不平を興し、全身違和を覺へ、嘔吐を催し、冷汗を流すに至る、故に此等の難儀を忍で、啻習ふに及ばず、但適宜に用ゐれば、健康を害せず、疲勞を休め、憂ひを驅り、稍々消化の機能を進め、能く勞神に堪へ、勞働に耐へしむる効あり、用法を誤

る時は、神經の興奮と、筋肉の衰弱とを致して、身心の疲勞を招き、種々の腦病、及眼病の因と爲る事有、又其煙を嚥下する時は、胃を刺戟して、慢性の胃病の因と爲るのみならず、煙草の毒(多く煙の中にあるもの)を、体內に吸收する媒介と爲る事有、

右の外、猶種數の飲料あれども、要少ければ略しぬ、右の内にて、茶、咖啡、を除き、其他は衛生上のみならず、自ら身の品位に關するもの少からざれば、特に婦人方は用ゐ玉はざるに如くは無し、子女を成育爲すにも、亦此等の心得肝要なるべし、

第三　水

水は人の生活に無二の貴要品にして、水無ければ人は一日も生活爲す事能はず、加之禽、獸、魚、虫、草、木の末に至るまで、亦水無れば一も生活する事能はず、諺に尊きものを水火と言へども、火なくとも、生活する事を得るも少からざれ共、水無き時は、天地の間に生氣あるものは、悉く枯死すべし、生理學者、人の身を分析して、其百分の六十三分は、全く水にて成りたるものなる事を確定したり、水の人の生活に至貴

至重なる所以を覺りつべし、

水には色々の種類あれども、其元は一にして、大陽の温度に因りて、常に其所を變じ、又形をも變ず、則地上の水は、大陽の温の爲に蒸されて、水氣と爲りて、空中に昇る、水氣漸く冷なる時は、凝て雲霧と爲り、冷氣猶増す時は、露と爲り、雨と爲り、又霜と爲り、雪と爲りて、復び地に下り、或は土壤を潤し、或は流れて江河に入り、湖海に注ぎ、其一分は再び直に蒸發すべし、其地に入りたるものハ、地中の緻密の層に達し、合て地水と爲りて流れ、出でゝ天然の泉と爲り、又は人工の井水と爲り、河海に注ぎたるものと同く、復た大陽の温の爲めに蒸されて、蒸發し再び雨露雪霜と爲りて、下る事初の如し、故に水は常に天地の間を循環爲すものにして、恰も環の端なきが如く、其循環の間、空氣又は地中にある種々の物質に出逢ひて、爲めに已の質を變じ、或は人の飲用に適する良水と爲り、或は飲用に適せざる不良の水と爲るなり、人の身の健康あると、不健康なるとは、水の良否に因る事多く、又或一定の病は、全く水の良からぬ爲に興るものなれば、水を撰用するに當りて、其根元を一通知り置く事は、無益の事に非ざるべし、次に水の種類に依りて、善

惡る事を述む、

茶事（承前）

藤井行麿

○利休燈籠堂、深三疊萱ぶき壁もかや、姥口新釜、かな風爐小板なし疊直置、上座の柱に高麗筒に花を入る、茶入備前燒白地金襴の袋をかけ緒つかり紅、水さし釣瓶、茶匙をりため、水覆めん桶引切橋立御壺、

○宗及、しほやの體にしつらへり、押板に定家の式紙、新釜あられ、瀬戸水指、水覆棒の先、天目臺なし、此萱葺の體御賞美ありしよし、

○道安、二疊半、青松葉にて壁を仕組、家根は笘をふく、かげ風爐、新釜、國燒茶碗、手をけ、面桶、引切、

○博多祥谷宗湛、二疊半、青かやぶき、壁くゞりまですべて青萱、床一疊かまち大竹、古風呂眞形釜、關白御成の時、床に錦褥、しきて御膳差上る、御茶の時には下りさせられたるよし、

○天正十五丁亥十月一日より北野松原に於て、十日の間催されし大茶會は、拜殿七

間に搆上三間眞の間下四間草の間、
上三間を生茶會といふ、下四間亭主四人、青竹の割鬮をとらせ給ふ、關白殿下一の鬮にわたる、莊飾はすべて御物を以取合となる、

○一の間飾付御水さし、銅釣瓶、釜をと御前、茶盌井戶、御茶入新田肩衝、茶抄折ため、慶首坐作、花入青磁筒、

○二の間亭主利休、釜責紐、塗公土、水指紹鷗備前燒、床玉礀雁之畫、楢柴肩衝四方盆、御茶碗天目、外に三嶋狂言袴、不破香爐、布袋香合、御茶入內曇大海、蓋置古銅、捨子壺、浩上林、

○三の鬮、受世法眼更幽齋宗及、御床王礀自贊、枯木畫、御釜姥口、塗九土、水指釣瓶さし物、御茶入面白肩衝、四方盆、撫子御壺、千鳥香爐、長盆、面桶、引切、

○四の鬮、宮內卿法印昨夢齋宗久、入道蜘之御釜、床大軸月之畫、初花肩衝、四方盆、松花御壺、志野燒茶盌、

○關白殿下一の間、御客は近衞殿始貴顯の人のみ、外三間に於て御茶、被下面々人數八百十五人、社頭の砌より松原に至まで、大名衆其外洛中また諸國より登たる、

町人百姓まで各數寄屋を搆もよはしたり、其一二をいへば、細川三齋侯、平三疊、床盧堂墨蹟、釜眞形共蓋五徳居、水さし釣瓶、茶碗井戸、替瀬戸、茶入棗、石田治部少輔、壹疊半、床定家小倉色紙、俊成卿の歌、霰釜釣瓶、大壺遲櫻、茶入肩衝茶盌セト、また攝州有馬湯山にて催されたる大茶湯ハ、

○利休搆の席は於阿彌陀堂、御物天猫操口釜掛之、又天正十五丁亥正月三日、大坂御城に於て、數茶間數之莊ありしは、三間床、晩鐘、青楓、落雁、なでし子、覆萌黄小金襴、として緒紅、四十石覆、として結前同、松花覆、トメヲこれも同斷、床の外左右に花入、御緣側四間四莊、關白御臺子、宗易手まへ、紹鷗白天目數の臺、茄子の盆、象牙茶杓、胡樹口杓立引拙、小霰釜、風爐切合、太皷筒蓋置合子、

○休臺子手まへ、宗易、新田肩衝、井戸茶碗、合子四方盆に棗、炭汁ふくべ、

○中之臺子手まへ、宗無、面白肩衝、四方盆、釜眞形、緣桶棗盆、柄杓立合子、炭取瓢、風爐釜火箸すべてみな金、

臺子の手まへ、宗及、初花肩衝、四方盆、芋頭水さし、松本茄子內赤盆、抄立備前燒、建水瓶蓋、塗天目茶盞入、責紐釜、ふた置五徳、尼子天目臺、あし風爐切合、

惣御客廣間にて、御相伴給仕五奉行、殿下上段之御座、御裝束小袖黃、五ッ襟一色下白綾、萠黃御道服、紅くゝり、頭巾御髮はらい結、帶長く御まへにむすび足までかゝる、懷石御振まひ濟、御小姓閣を持出、投出さる人々これを取、誰々の間とわかり定る、一二三四の文字ありて人數一組づゝと成、

○天正二十壬辰年、肥前松浦名護屋城に於て、高麗對陣の間、太閤御會、諸侯以下へも御茶被下候時、これ所謂何番茶なり、一座六人宛一間之かざりを以て、一組一組入て給る事、六人の次第座配紙にかきつけて、御露路口の壁にはりつけあるを見て、辭讓なしに入、金の御數寄屋平三疊、はしら敷居かもゐともみな金をのべてつゝむ、壁は金を長さ六尺廣さ五寸に延て厂木ばりになし、四枚の腰障子骨と腰板は金にて包、あかき紋紗にてこれをはる、疊の表は猩々緋緣は萠黃皮むきの木なり、圓座三ッあり、六人の次第四五六の三人は御廣間にて茶請玉はる、一二三の三人、右圓座をしきて緣に居り、御數寄屋へ入て椀に盛、御雜炙折に小豆を盛玉はる、順に被下、中立よりは六人つゝ揃て入る、御道具悉皆金盡したゝ茶碗のみ井戸、同年十二月十四日より同十七日に至まで四日間、城山山里御數屋に於て、被催たる御茶

會、四疊半敷、十四日朝、床晩鐘、前に小茄子、四方盆、勝手隅折に四十石御壺、白天目、水指芋頭、釜責紐、水覆瓶蓋、ふた置太鼓筒、同十五日床朝山、まへに鴫肩衝、四方盆、隅折に撫子御壺、井戸茶碗、以下同前、同十六日床落雁前に初花肩衝、四方盆、松花御壺、尼子天目、此外は同前、同十七日床夜雨、前に長會利花入、丸香臺、捨子御壺、御釜乙御前、新田肩衝、

○文祿二癸巳九月廿二日より同廿四日まで三日、伏見御城山、沈香亭に於て、御茶會床、四十石富士香爐、四方盆、鴫かたつき、紹鷗いもがしら、井戸茶碗、水こぼし備前、釜乙御前御料理、海老ざし辨當に入汁雁芹身たゝき、引て雜煮大椀に入る

豐公在世の御茶、其外ふるき茶會は、茶壺、茶入を重むずるとなりしは、まへにしるしたるを見てもしらるゝなり、かゝること共とり出ていへば、數かぎりなきとなれば、こたびはこゝにとゞめて、茶事はまたしるしぬべし、(完)

學園

百人一首和歌の解 (つゝき)

井口隆太郎

相撲

うらみわびほさぬ袖だにあるものを戀にくちなむ名こそをしけれ

此れほど戀ひ慕つて居るのに、先方では何とも思はず、つれない事ばかり云うて、鳥渡も此方を思つて下さらないから、終始恨んでばかり居て、心が不愉快至極になり、いつも〳〵泣き悲しむ涙の爲に、袖がぬれてかわく間もない、其のかわかない我ガ袖でさへあるのに又此の上に此の頃は、人が何やかや噂をいひ立て丶、我が名も朽ちはて丶しまひさうに成つてきたが此の戀故に朽ちはて丶しまふであらう、我が名はかへすかへすも惜しいことである、

ほさぬ袖とは、乾しかわかさぬ袖と云ふことにて、常に涙の爲にぬれて居るを云ふなり、

大僧正行尊

もろともにあはれと思へやまざくら花よりほかにしる人もなし

誰も來る人のない、此の大峰の深い山中に、唯ひとり山櫻が咲いて居るが、見れば此の櫻一本にて、外に友もなにもない様である、自分も唯ひとり、此の山中に

分け入りて來た事なれば、外に誰も友と云ふものもない、丁度此の櫻と自分とは一人づゝで、こんな深い山中に居ることで有るから、汝と自分とは、互に感じ入つて思ひあふべきことで有る、されば汝も自分と同じ樣に、左樣に思へ山ざくらよ、こんな深い山中では、此の櫻の花より外に知る人もないと思ふから、自分は實に心に感ド入つたわい、それだから山櫻よ、汝も心に感じ入つて思ふたがよいわい、

あはれとは、嗚呼と云ふことにて、心に感じ入ることなり、

此の歌ハ、紀州の大峯と云ふ深山の中に、わけ入りし時思ひがけなく、櫻の一本咲きてありければ、それを見てよみたるなり、

周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそをしけれ

春の夜は甚みじかいものであるのに、しかもはかない夢のやうな戯れごとにて、あなたのお手を枕にしましたなら、人々が見つけて何やかやと云ひ立てゝ、浮名を、立つるに相違ない、實は眞のわけもないのに、何の甲斐もなく、人にかれこれ

と云はれて立つであらう、其の浮名が妾はをしいことである、それゆゑ妾はあなたの手などは、鳥渡でも枕にして寢ると云ふやうなことはしますまい、

かひなくのかひなに、腕のかひなを云ひよせたる心しらびが、面白きなり、

此の歌は、二月頃二條院と云ふ處に、多くの人々が話などして夜明しせし時、周防内侍が、枕はしいと云ひたれば、大納言忠家と云ふ人が、手を簾の下から出して、これを枕にしたまへ、と云ひければよまれたるなり、

三條院

こゝろにもあらで浮世にながらへば戀しかるべき夜半の月かな

最早自分はとても、此世に長く生きながらへては居るまいと、心には思つて居るけれども、思ひの外に、此の浮世に存命して居たならば、其の時には今夜の月が、まあどの位こひしう思はるゝで有らう、つく〴〵考へて見れば見るほど、どうも其の時になつたなら戀しくありさうな、今夜の月では有るわい、

此の歌は、三條天皇が病氣でおはしまして、位を去うと思しめしゝころ、月の明らかなるを見てよみ給ひし御歌なり、されば此の歌をよみ給ひし大御心は、最早

ほどなく位を去らうと思ふから、禁中の月を見ることも今夜が限りであらう、位を去りて後は、再び禁中の月をかうして見ることも出來ないから、さぞ其の時になりたら、今夜の月か戀しいことで有るだらう、といふ心をふくめてよみ給ひしなり、

能因法師

あらしふくみむろの山のもみぢばは龍田の川のにしきなりけり

大和の國に三室山といふ山があるが、其の山に丸で錦の樣にもみぢがして有る、其のもみぢに嵐といふ強い風が吹いてくると、其の三室の山のもみぢ葉が、そのまま龍田河へちりきて流るゝのが、丁度錦のやうに見ゆる、どうも何ともいはれぬ景色ではあるわい、

此の歌の三室山は、大和の高市郡にあり、然るに龍田河は、龍田山のふもとにありて、平群郡なり、故に三室山と龍田河とは、遠く隔りたる處にて、三室山のもみぢが、龍田河にちりうかぶべきはづなし、此は能因法師か、地理をあやまりてよまれたるものなるべし、

良暹法師

さびしさにやどをたちいでゝながむればいづこもおなじ秋の夕暮

すべて秋は淋しいものなれど、今日はまたあまり淋しいかして、我が住んで居る家を立ち出でゝ、他處はどうかしらんと思つて、あちらこちらをながめ見わたす處が、どこもかしこも同じことで、矢張淋しさはかはらぬ秋の夕かたのけしきではあるわい、

大納言經信

夕さればかどたのいな葉おとづれてあしのまろ屋に秋風ぞふく

此の樣に、田の中に家を作りて住んで居ると、丁度人か外から訪ひ來るとき、先門口にて案内を乞ひ、さうして奥へ通る樣に、夕暮になるといふと、門さきにある田の稻の葉に、そよ〳〵と音がして、そのまゝ蘆でまろく葺きてこしらへたる家に秋風が吹いて入るわ、どうも秋の風の吹くありさまは面白いことである、

祐子内親王家紀伊

音にきくたかしのはまのあだなみはかけじや袖のぬれもこそすれ

かねて人の噂に高うきこえてある、あのたかしの濱に立つ所の浪は、あだ〴〵しいものであるさうだが、あなたの心もあの浪の通り、あだ〴〵しいと云ふことは、遠から評判高く聞いて居りました、其の樣にあだ〴〵しい心を持つて居る人の仰しやる事を、どうして妾か聞き入れませうか、妾はあのたかしの濱のあだ浪を袖にかけない樣に、あなたの仰しやることも聞き入れはしますまい、なぜかならば、あのあた浪を袖にかくると、袖かびしつよりにぬれます、丁度其の樣にあなたのあだなることばを聞き入れますと、果々は袖をぬらして泣くやうなることが、あるであらうと思はれますから、どうして〳〵あなた見た樣な、あだ心のある人の仰しやることばは、聞き入るゝことは出來ませぬ、

此の歌は、あだなることばを聞き入れぬことを、あだ波を袖にかけないと云ひなしたるなり、

かけじやは、かけまいよと云ふことにてやは感嘆のよに同じ、

女子書牘文論（承前）

菅喜田和三郎

女子書牘文論の主意は、當今婦女子の、一般にかきなすべき文体の標準を作りいだして、大方諸嬢の一覧を辱うせんとするにあり、然れども、その前に當りて、事の順序と、必要とによりて、本邦書牘文の沿革の一班を述べんことを、兼て約しおきたれば、今はそれより言ひつゞけんとす、

さて、本邦書牘文の、古くものに見えたるは、竹取物語などぞはじめなるべき、竹取物語、かぐや姫の天に上らんとする時、暫時、天人を制し待たせて、帝に奉りたる文あり、こはもと作物語にて、實際にいあらぬ事なれば、如何と打かたふかるれども、かゝる文体の例として、擧げんには、妨げなかるべくおもはるゝ故、左に掲げてん、

かく數多の人を給ひて、とゞめさせたまへど、許さぬ迎、まうで來て、取り率てまかりぬれば、口をしく悲しきこと、宮仕つかうまつらずなりぬるも、かく煩はしき身にて侍れば、心得ずおぼしめしつらめども、心強くうけ給らずなりにしこと、なめげなるものに思しめし、とゞめられぬるなん、心にとまり侍りぬる、

今はとて、天の羽衣、きるをりぞ、君をあはれと、おもひいでぬる、

とあり、先哲の説に、竹取物語は、延喜以往、大同以後の作なるべしとあれば、大凡紀元千四百年代より、千五百年代へかけてのものなり、而して今あげたる文例を以て、當時消息文の、文体の一例として見ることを得たらんには、當時の消息文は、實に消息文の純美なるものとなすことを得べし、何となれバ、雅に失せず、俗に流れず、實用を離れずして、人をして其意のある所を、覺り易からしむれバなり、中古以後の消息文の癖として、語を省き、意を深め、人をしてその意の在る所を知るに苦しましむるものと、大に異なり、次に宇津保物語十九の巻に朱雀院へ大宮よりの御返事の文あり、そは、

かしこまりてうけたまはりぬ、おほせごと給ひつる人は、このひるつかたより、物ものたまはす、ことたのもしげなくなん、かくてもたひらかにある物とは思ふ給へながら、こゝろぼそくなん、

こもいと素樸に近く、竹取物語と相似たる同例なり、又同書ながら左に揭ぐるものは、少しく辨へぐるしきことあるか如くなれども、まづ竹取と同例となすへし、後々の源氏物語枕草紙などにあるものとは、大に殊なるところあればなり、

同書國讓の巻下、帝に藤壺よりの御返事の文に、
いと珍らしく給はせつるは、かしこまりてうけたまはりぬ、いとも〱嬉しき御よろこびは、先、奏せんと思ひ給へしかども、月頃仰言も侍らざりしかば、いかなる御けしきにかと思ひ給へつゝみてあん、山びことかやのたまはせたるもいざや、
白雲も、色かはりぬと、聞しかば、山びこいかゞ、答へ憂からぬ、おぼろげにや、まゐり侍らんことは、此宮今日明日まゐりたまふべかめり、同じくはとてなん、
これ等を、女子消息文の第一期として、源氏物語などより以下を、第二期とすべし、以下第二期のもの、一ッ二ッを掲けん、そを比較、對照せば、第一期は素樸にして、意を解くに難からず、文詞も俗ならず、第二期は文詞漸く巧麗を貴び、意を解くに難き傾きあることを知り得へし、

（つゝく）

漫録

楢の舎歌かたり（承前）

富田馬太

荷田民子は、國學の四大人と尊ばるゝ中の、春満うしの族なり。歌はよみ口なりしにや、その詠草どもを見るに、いひ得られたりとおぼしきは少からず。實に古學者の女たるにはぢずといふべし。その歌体にいたりては、もはら古風をうつされたるにて、やゝ質朴なるよみざまなるは、時勢のしからしむる所なるべし、橘千蔭が、刀自のうたのさま、をとこ山のをゝしき者なるは、つねのこゝろおきて、いさゝめにも、たをやめのくね〱しきならはしなくて、加茂のみたらしそこきよく、淀のかは水よどめるすぢしもあらぬ心から、おのづからいひいづることも、しかなめり。といはれたる、さもあるべきことなり、湖上花を、さゞなみの近江のうみに舟はてゝ比良やま櫻ちるまでも見ん、とよめるは、女性の口つきには、似つかれしからぬ雄々しき歌なり。又岸姫のつねに物わすれすよとてわらはせ給ひければふみのおくにかきて奉りけると詞書して、すみの江のきしてふ君になれぬれハ忘るゝ草はおひしげりける、とよめるにて、その才氣のたゞならぬことも知らる。火事におひておくる年、ぬす人しのび入り、家財など多くとり去りしあとにて、とにかくにわが世は末

の松なれやうき身の上にかゝるしらなみ、かくばかり世をうみわたるわれとしもいざ白浪やこゝろよせけん、末の松もなにかたのまん時しあればわがやどにしもこゆるしらなみ、などよめるは、古歌に、君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山なみもこえなん、とあるに思ひ合はせて、その當意即妙なるをあぢはふべし。

ながうたは、萬葉集の後は、殆たえはてしともいふべきありさまにて、偶よみ出る者もありといへども、いたづらに詞をかざり、句をあやなせるばかりにて、長歌として見るに、一文のあたひなきものなり。感情をもらし、想像をゑがくの手だてとして、僅に三十一字を借るに止まりしは、なげかはしともうれたしとも、のこり多きことなり。

しかるに、徳川氏の時に至りて、難波の法師、契冲長流などいふかしこき人ども、しきりにいにしへまなびをとなへ、數百年間、絶えて見ること叶はざりしほどなる、長歌を詠みいだされしは、まことに有りがたきことゝいふべし。その言葉の花筆のにほひの、家集どもにかきのせられたるもの、今尙われ／＼をして、その高風をしたはしむ。ことに契冲法師が六道のうた、及無常の詠などは、その字句の多きこと、驚くべきほどなり。されど、かの萬葉の骨髓を得て、神通自在なるにいたりては、縣居翁岡部先生なりとす。實に先生の萬葉風の、四海をなびかしたまひしこと、春風のわたるところ、青柳のよそめくにひとしかるべし。されば其の門にあそび、その流を汲むもの、何れも古体の

長歌をつゞるに巧なりしものなり。倭文子がなくなりし時の、くやみの歌とて路子がよめる、

この秋やいかなるあきぞ、ふく風の何そのつての、およづれかおとなふならん、人の家におはしたてつゝ、またきよりにほひし小萩、うつくしと聞きしとこあつ、はぎが花うらわかゝれど、とこなつのとこしへにもと、父母はいはひにけらし、たのめつゝすぎけんものを、いとまだきさかゆるいろの、うつらふもはやきならひの、うつし身ぞかなしかりける、花もみもありけん人の、なかく〵にうたてある世や、あたらしの世や、

反歌

吹きすさふ野風をいたみちる萩に

ひとをよそふるあきぞかなしき

及、しげ子がよめる、

をちかたの野邊の草木の、言をだにとはずなりにて、うつし身のしたしき友にしかりともつげもあへずや、ひとりのみいづちいにけん、を絶えせしたまのゆくへと、聞くからにことばともなき、おほぞらをながめてふれば、雲まよひおちくる風の、うちそよぎうたて萩のは、みだれつゝ露のくだくる、庭のおもにたれをまつ虫、かひなしとおもふものから、何しかもわれもさはひてなかるらん、花のあしたも、月の夜もうれしきをりも、うき時もことにつけつゝ、うちそはしをみなのともの、うらもなくかたらひかはし、こともなく見ねし手ぶりも、玉かつら面か

げにのみ、朝夕にみてやしのばん、今よりのわか世に見なん、月花もいかにさびしき、おもひしてまし、

反歌

ある世にもわりのすさひはおもほえぬ
　人にわかれんものとやは見し

などいづれも、翁の敎の露をうけて、生ひ出でし言葉の花なるべければ、なか〳〵及びがたき口つきなり。これは、長歌の今の世に興り出でんこともつとも望ましう思ふところなれど、徒に奈良朝の耳どほきことばをかつぎ出して、歌をてらはんとする者の有るを、しりぞけて止まざるものなり。

（つゞく）

朦朧月

忍の舎主人寄稿

よのなか、いろ〳〵とうつりかはりゆくことを聞傳へはんへる、われ徒然の折から柴のいほりのうちにて、そこはかとなく、よしあしの物語を聞て理をつめ、工夫して見はへるに、そのこのよしあしきこと、おや子、君臣のあいだ、夫婦、はらから、友どちの交り淺からず、聖人の仰置れし御言の葉、又は、つね〳〵の御身もちとき〳〵のかはりゆくにつけて、くはしく書物にあり、女子のをしへも、聖女、賢女、貞女その余いろ〳〵、おろかの筆に盡しかたきふみともあまたありといへども、それを、われ人心にかけ、道理を合點し、論をつめ、我身のしんかう工夫せし人はなく、今時の風は髮のゆひやう、

びんのけつりやう、又は衣類の模様、これより外によき事ハあし、とおもひ給ふは、淺ましきかな、いたましきかな、そのいにしへ、西土のをしへにくはし、然りといへとも、是は賢女の風はおそろしなと丶嫌ふ人あるへし、和國のならはしいとやさしく、殊に吉田の兼好とやらんかかきしつれ〱草、亦は紫式部か作りし源氏物語、これに雨夜の品定めの内にもいとはちかはしく、又はやさしく、女のつたなきをそしり、よきをは上のしなとはめてあり、しかれ共、今時は何とやらん歌書を戀の媒と心えて、もし見る人のあれは風儀あし丶、それは用ゐやうのあしき故、人參はと命をつなくものはなけれとも、用うましき折から用うれはあし丶、人參のとがにあらす、用うる人に有、萬ツ世の中のよしあし共に、傳聞てハすへし、てんちの内、何か義理をまぬかる丶ものあらんや、能々考へ工夫すれは、さすか天性そなはりしゆゑ、たれにても、外よりきたる事にあらす、みなこれはと中庸の理にあたるへし、おろかの身なから、くさのゆかり故に、人に笑はれ給はぬやうにと、あまりいたはしくおもひ、書贈りぬ、かならす人に見せ給ふへからす、

一今度、何かしとやらんの行給ふよし、なるほとつ丶しみ給ふへし、わか身はいとけなき頃よりさすらへの罪にしつみし身なれは、よろつの事いさしらす、此じぶん爰もとへ來り、世間のはなし聞侍る、とりわけ夫婦のあいさつにつけ、つ

たなき事いとおほく、脇にて聞にくき事のみ侍る、それにつき、萬ツの内ひとつにても、若平常の身持やうの便りにやならんとて、書おくり侍るそかし、

一夫といふものハ義理において、あなつり輕しむるものにあらす、天の徳なり、かく有ゆゑ、隨分尊み律義に、かけひなたなきやうに、有躰に心を持へし、我に情ふかき時は、機嫌よくうらゝかにつかへ、又なさけうすしとおもふと、皆人々顔くせあしき由傳聞ぬ、それはさもしき事そかし、腰本や遊女躰の身持ならん、さふらひの子たるものは、夫婦は一躰の身なれは、夫との耻は妻のはち、妻のはちは夫の耻そかし、互にあしき事あらは、人や聞らんと大切に思ふへき事あるに、夫のあしき事を聞立んとするは、極めてあしき心底なり、女は地に譬へしものなれは天にしたかはぬ地はあらし、其道理を考へ、夫我になさけなくあたり給ふとも、又はやさしくとも義理をみだし給ふへからす、夫のためよきやうに、家の事をはからひ、しもすゑのものまてもやさしくあたりたまふへし、それとも上むき輕薄にだましたまふへからす、いかなるおろかのものも、人のうへはよく知るものなり、しもすゑはつたなくあしきことをいひ、はかなき事のみ多し、ゆるし給ふへし、よき所を見屆給ひなは、それをほめ給ふへし、此心得すれは、おのつから家來も、我も心うちとけ、あしき事はなし、第一夫によからぬ事をいひかけ、恨み給

ふへからす、親子さへふだん住めは、互に心にかなふ事はかりはなし、況他人の寄合なれはなり、しかれ共、夫婦の挨拶は心安きよし、さある故言ましき事をいひ、うらみ出るならん、去なから二葉の松の雲にそふまてと、思ふあいさつも堪忍せねはならぬものそかし、人の家にゆき、吾家となす事あれは、苦勞あるへし、かならす／＼、何國に在とても、我思ふやうなる事はかりはなし、何事につけても、父母親類中のおもはくあれは、叓を耻て思ひ給ふべし、父母は過し身と思ふへからす、きしんとなりてあまつみの〇〇にあきらかに御存知あり、子のよきはうれしく、おはしめし、悪きはつらく、鬼神も安んし給はす、叓をよく／＼合點あらは、彌よろつ心を無欲に持給ふへし、むさはるこゝろよりあしき事起るなり、とりわき欲のうちにも、色欲淫欲ほと、身をほろはすものはなし、これより嫉妬いてくるなり、

一しうとめと、あいさついろ／＼世間に聞にくき事おほきそかし、たとひかぶんにしかり給ふとも、又はふすへ給ふとも、たつとひうやまひ給ふへし、それとても、しうとめ腹立給ひなは、とかういはすに、あやまつ風情して居るへし、さあれは、いひやむ事もあるへし、（つゞく）

藻塩草（承前）　榴の舍主人

一まだわかき人のならひ、何とも譯もしれず、なにとなく不機嫌にて、さすが人目たつほどにも

なく、いぶかしきことも、日數ふることも有るものなり、これはなにぞわが方に、おもはずも、心にいらぬ事あるべしと、身をかへりみて、一しほつゝしみ、そのあやしれて、あらたむべきことならバ　すみやかにあらため、ことわりいふべきことならば、はやくことわりをいひ、心外のあやをわきまふべし、あるひは、むドつ又はうたがひにて、身にあやまりもなきとならば、いくたひもそのことわりをのべ、いよ〳〵つゝしみ守りてつとむべし、いかにわが方にあやまりなく、無理無實のふきげんにあふとも、かまはねていは、不禮なり、隨分まめやかに、きげんをとるべし、

一めしつかひのもの、夫の心にいらぬ事ありて、きげんそんじ、いかるときなど、急にとりなしいひわけすること、ことの外あしきものなり、まづもろ心に、夫の心に合はせてあいさつし、しかるべきことは、うけこみあづかりて、心をゝさめ、腹をゐさせてのち、いひつけあることは、しなよくとりなし致すべし、總ドて人のはらだちいかれる先へ、急にさしあはせなどやめ、わひごとはあはぬものなり、たゞ氣をたすけ、いかりをあづかること、かん要なり、心をさまりては、とりなしことわりも、きゝ入るものなり、はやくいかりをあづかりて、心をゝさめしむるがよし、しかりとて、かげの間のしらぬ惡事までいひ出し、是を非にたきつけすることは、さたのかぎりなり、只當分のあやまち一しなまて

數そへぬがしかるべきなり、ことに夫のてかけものなどは、時のてうしにて、夫いかにあしくいひ、いかることありとも、これをさいはひに、つねのよしあしいひ出すこと、ゆめゆめあるべからず、主人いかりはらだつには、いつも其あやまてるしな、無くてはかなはねば、その一事のみ挨拶して、其場をすまし、いかりをゝさめ、氣をてんずること、肝要としるべし、

一妹脊のみちは、みめかたちにもよらず、すぐせといふことにて、縁ふえんあると見えたり、われいかに夫を大切に思ひ、女の道をつくすといへども、夫の心にかなはず、はじめよりしぶくなる中も、あるまじきものにあらず、またいじめは、比翼連理とちぎれども、程なくうつらふ人ごゝろにて、外の女にこゝろをうつし、われをうとみ、つらくなるもあり、多く子供をなし、世帯じむにつけて、あきめのつくもあり、そのほか夫の心もちは、さま〴〵のかはりはありとも、女は只ひとすぢに貞節をたがふべからず、さばかりたぐひなき姫宮ときこえさせたまふも、あづまの空にくだりたまひ、つくし日向の遠きくにより、大名の姫君も、みやこへとてのぼりたまふも、皆殿一かたの御たのみにて、とつぎたまふながら、御縁なれば御中よきもあり、あしきも有りとぞ、きこゆる、下ざまの女は、身のすぎはひとて、としふる迄、いく度もよめ入りして、恥とも思はぬけしきなれど、これもむかしは、四十すぎてよめいりなどは、はぢかは

しき習にいひおもひて、大かたはつとめなどせし故、よきとしより奉公人も多かりしが、いまは、よき主人もち、やしなふ人ありても、身のかたづきとて、五十のうちそとの人、よめいりして恥とも思はず、世人も、其わざの事にならはして、かゝる人をもいとはぬ風俗になりぬるこそ、うたてけれ、とにもかくにも、女は一たびとつぎたる夫の家こそ、位牌所なれば、たとへ夫の心かたましく、われにつらくとも、いかにせん、かゝるすぐせぞ、とおもひあきらめて、身にはみさをゝみださず、つとめおこなふ道には、かはりあるべからず、しからば、天の照覽あり、人情木石にあらず、遂に夫のよろこびを得て、むつましからんこと、うたがひなし、

一緣よくてむつましく、夫の寵愛あさからぬは、女のさいはひ、至れるものなり、かゝりとても、ちようにほこり、愛にあまえて、いつもかくあるへし、と思ふべからず、あすか川の淵瀨、かはりやすきは夫の心にて、けふのちぎりも、たのみがたし、ちようあいにも、づらさにも、かはらぬものはみさをにて、かりにも夫をあなどらず、身をつゝしみ、言葉をつゝしみ、たゞかへりみてくらすべし、

一夫の病あるときは、寢食をわすれて、身の勞をいとはず、心をつくして、看病をこたりなかるべし、尤養生は、常に心をつくべきなり、ことにやめる時をや、少しもゆだんせず、保養をつとめ、食物醫藥念を入れ、ますく＼つとめ勤

むべし、わがけはひしまひ等に、ひまを入れて、そばを遠のき、ぢよさいすべからず、

一何によらず、夫のいひつけたらんことは、すみやかにつとめなして、二度といふまでのべおくべからず、たとへ、わが趣向とたがひたることなりとも、しぶり延引すべからず、なにとぞついえなること、二ざいなること、手まはしあしき事なれども、夫の心づかずして、申しつけらるゝやうのこともあらば、まづ一とほりこゝろよくうけてのち、そのしなをことはり、だん合して見べし、さしあはせ、それよりからがよし、さうはあしくなどゝ、言葉をあらそひ、夫のことばのこしを折ることとは、せぬことゝあり、

一夫の友人、ときの人出入などありて、時をえらばず來りあそび、夫もこゝろよくかたりて、もてなしたらんに、いかほど心むつかしきをり、または、外の用あるときにても、少しもぶあしらひ、ぶせう顔、出すべからず、いかにもこゝろよくあしらひ、夫の心にかなふ樣に、とも〳〵もてなしとりもつべし、またつねにかくするとて、夫の心に叶はざらんをりふし、一人だちともてなしなどせんは、しかるべからず、とかく夫の心にまかせて、用捨あるべきことなり、尤をつとをさしおき、あいさつ、その外さし出たる風情は、ゆめ〳〵あるべからず、

吉田贈正四位の書簡

のむらのみつぎ

詩經に豈無膏沐、誰適爲容とか申句、曾て何心なく讀居候所、後曹大家女誡專心の篇を見候得は、上下の文ありて、中に出無冶容、入無廢飾、此則謂專心正色矣、とあり、又上下の文ありて、入則亂髮壞形、出則窈窕作態此謂不能專心正色矣、と有之候、依て相考候は、詩の語も徒らに夫の居さるを歎くの事に非ず、膏沐は偏に夫に事ふる禮にて、他人へ見せものに致すには無之筈に而、詩語の禮意かと奉存候、當今少婦輩、內に而は乱髮壞形し、外に而は窈窕作態を當り前の事と考候樣相見候、是は古禮に叶はざる事と奉存候、此說先年見付候得共、未だ前人之確證も不得、又た先輩へも質入不申故、人にも告け不申候間、丈人樣尤とも思召候は丶、宗族中の婦女共へ、此趣御講談奉賴候、閨門は正宗の本に候へば、犯姪の迂論に不及して、人々海容の事とは奉存候へ共、訣語申上候也、

五月十九日　　犯姪寅次

玉木丈人樣

女誡七八篇後漢書ゟ抄錄讀餘推抄四冊の終に置けり

右吉田松陰先生の書、去ぬる年上野櫻ヶ岡に開ける好古會にて一見致し候まゝ、寫し取候ひぬ、先生の經國緯家の大才ありしことは、今更いふに及ばず候へ共、其國事に刑死する時に於て、尙婦女輩のことにつき、此の如き訓誡をさへ遺され候事、いとも〳〵珍らしや、其の閨門は正

宗の本云々といふに至りては、先生の親切なる顔容、今見るが如くにて、私かに今世女流の上を瞥視せざるを得ざることゝち致し候、女かゞみを友とせらるゝ方々には、要なからんとは存候得共、三十年前の昔をてゝに返照して、而もたぐひめでたき先生の書なればと存候まゝ、ひめぎみたちの御もとにまゐらするになん、

○ジヤガタラ文

深江遠廣寄稿

此の一章は、長崎夜話艸に見えて、甚もめつらしき一話なれは、前後の文ともに、茲に掲けて、眠り覺しに供す

寛永十六年、巳卯の事にや、紅毛國も、蠻國に類ひせし水土なれば、その種子、日本の種子に混雜すべからずとて、則、平戸、長崎に在し、紅毛血脉のともから十一人、咬𠺕吧へ放流せられ、此時よりじやがたらへも、紅毛人住居ありて、平戸へ年毎に船つかはしぬ、此ゆゑに紅の子孫みな、咬𠺕吧へ遠流なり、此十一人も皆長崎より歸帆の紅毛船に乘て、放ちつかはさる、是は蠻人の種子とは違ひ、紅毛船は日本へ停止にもあらねば、年毎に來れる紅毛船、又は、唐船も、往來あるゆゑに、故鄕の親き程、あるひは友たちなとへ文つかはし、送り物おとしなく〱ありし、其中に長崎何れの町の女人、父は紅毛人にて、母方のよしみあるが許に養はれ居たるに、此年十四歳あるを、咬𠺕吧へ流されたり、此女顔かたち、いとうるはしく、手

習ひ常に草紙など習ひて、さかしきこゝろばへなりしが、かゝる所に放たれつゝ、何のゆかりもなき程にて、明くれ、故郷へ歸らん事を、神に佛に祈りつゝ、年月を送りしが、かくて獨ありはてぬべきよすがなければ、命の露のよるへもとめて、もろこし人の妻となりてぞありける、此國には唐土人も多く住居して、又年毎に日本へ來る唐船もあれば、其便に文おこせしあり、見る人涙おとさぬはなし、よしなきものながら、三千餘里の遠つ島より流れ漂ひ來ぬる水くきのいとめつらしく、哀れに思えぬるまゝに、こゝにしるし侍りぬ云云

じやがたら文

千はやふる神無月とようらめしの嵐や、また霄月の空も心もうちくもり、時雨とゝもにふる里を出しその日をかぎりとなし、又ふみも見じあし原の浦路はるかにへだゝれど、かよふ心のおくれねば

おもひやるやまとの道のはるけきも
ゆめにまぢかくこえぬ夜ぞなき

御ゆかしさのまゝ、腰をれかき付まいらせ候、前業とは申ながらかゝるうき世にかひなき命ながらへ申さむよりは、たゞ世になき身となり候はゞ、いかにうれしからましを、たま〳〵花の世界にうまれきて、此身となれるとし月をかぞふれば、十とせあまり四とせがほどゝこそおぼへ候に、かくうらめしき遠き夷の島にながされつゝ、きのふけふとおもひながら、はや三とせの春もすぎ、けふは卯月朔日まだ東雲に、あすは出船と人の聞えつるに、せめて筆の跡してもとぞんト、なみだなが

ら硯にむかひまゐらせ候、いまだ夜ふかきほどにていたうくらければ、ともし火すご〳〵とかゝげつゝ、おもひ出る事共かきつくるに、此文のうら山しくも、古郷にかへるよと思へば、我文ながらありしよりげにものかなしくて、

水ぐきのあとはなみだにかきくれて
　　むかしをいかに人の見ましや

はづかしながら筆にまかせまゐらせ候そこもとよりの御文ことに御いんしんとゞきまゐらせ候まづ〳〵御つゝがなく御ざなされ候よし、めでたくぞんじまゐらせ候さて〳〵そこもとの御文くりかへし見まゐらせ候へバ、ひとしほ〳〵御なつかしさ、御すゐもしなされくたさるへく候、わが身はいまにつれなきいのちにて、ながらへまゐらせ候、いつのとき日にか、日本を出まゐらせ候や、いまはさたかにもわきまへかたう、こなたのとし月にはなぞらへかたく、たゞよるひるとなく、ふるさとのこと、つかのまもわすれやらず、おもひなぐさむひまも御ざなく候たま〳〵故郷にて見申たにおなじものとては、月日のひかりばかりこそ、そこもとにかはらず候ゆゑ、ひるは日の出るかたをながめ、夜は月の出るかたを打ながめ、袖のかはくまも御ざなく候、かゝる憂世にながらへて、かへらぬむかしをこひしやとのみおもはんより、たゞ此世になき身ともがなとこそいのりまゐらせ候へ、さりながら又うちかへしおもひかへせば、世をも人をもうらむべきにては御ざなく候、幾萬づの人か、此世にむまれきたる中に、我身いかなれ

ば異國の人の子とむまれ出たる事も前の世のむくいありてこそとおもひまゐらせ候、しからば今さら世をも人をもうらみ申ましき事にて御ざ候、もにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をば恨みドと、二條の后もつらね給ひしと承り候へば、いさゝか世をも人をも恨み申さず、われからとなくより外は御ざなく候、さりながら此まゝにてはてなんとは、存し申さず候、たゞ一たび神や佛の御あはれみにて、日本へ歸申へしとこそ思ひまゐらせ候、たとへ三日をすぐし侍らで、きえ果まゐらせ候共、いさゝかくるしからす候、とかくすゑは日本のつちとなり候はんとぞんドまゐらせ候、あれ〳〵神や佛の御いからひにて、今一度御げんに入申たく候と、くれ〳〵念願にて御ざ候、もしも又此世にて逢申さず候はゞ、わが身かね〳〵申たるごとく、友だちは七世の契と承り候へバ、かならず〳〵來世にてはめぐりあひ申へく候、げに〳〵御かたみの短冊、又をし鳥の羽など、かた時も身をはなし申さず持まゐらせ候、必ず〳〵來世にては、これをしるしにてめぐりあひ申へく候、又ぞやわが身花だんはなとおはせられて、御みせなされ候こそ、しづこゝろなくきえかへりまゐらせ候、此花のさかりには、そもしさまとこそながめまゐらせ候にかれ〳〵になりはてゝ、ひとりながむる山ぶきの、とへどこたへぬいろなれば、そさまの花の袖の香に、おくれし夢の面影を、見ることたにもまほろしに、あふはあふかはもろ共につひに消なん露の身のわれや先だつ、人やおく

るゝ、うらめしやわしり世にだに戀しきを、めかれなく契まゐらせ候はて、今は何事もみなあだごとゝなり行、むかし語と成まゐらせ候事こそ、ふかき思ひのたねとあこがれまゐらせ候、あらこひしのそさまや、しのばしの友人や、ひとへ二重の色のみか、やへ山吹をおくり給ふ情いろくちはてすおもへとの、御心のうちとこそおしはかられまゐらせ候、

山吹の花の千しほはかはるとも
　いはぬいろをばわれわすれめや

われらこゝろの中にさゝかかはりなふ、くれぐおもひまゐらせ候、

もろともにうゑてながめし山ふきの
　ちりてもはるのおもかけそ見る（未完）

寒紅梅

其二

中村花痩

強きは勝弱は負る今の世には、氏はともあれ名はともあれ、己が氣量の狹き廣きによりて、牛の後ともなり雞の嘴ともなるべし、涼しき眼目は胸に量られぬ才智を湛へ、氣味よく高き鼻筋濃く太き眉毛は、物を決斷るに遲延からず、潔平と結びしあの口元一たび開ひて、馬印の下に聲を出せは百萬の士卒も手足のやうに働くべし。

七歳八歳の小童に似合ず筋骨たくましく見ゆるは、自然に備はる勇士の形相、水呑百性の子とはいへその被切髪に見處あり、我が膝近き土地に生れさせて他國の武士に見出されなば、哀れ信行が一世の耻辱、今よりわが舘へ迎へ取り武稽の一と通り仕込、往く〳〵は我が股肱にせんずと、遣らじと云ふを無理所望して、育て上げしは則ち津田八彌なりけり。

信行が舘の大廣間、おのがそれ〴〵の勤務を濟ませて、漏刻の音に打ち集りし家臣ども、細作が持て來し戰爭話に大火鉢取り卷き、六十餘州の豪傑を品定めして餘念なく語らふ折しも、後の襖左右にはッたと開かせ、大股にのッさ〳〵と歩み來る大男。圓らなる眼は月の夜水底を光る貝殼に似て、鎌入れぬ夏草の髯むさ〳〵と、毛虫二ッ這わせし眉毛氣味惡るげに、棗のやうな顏色して大刀引き下げ、火鉢の側へ無言に割り込めバ、寄りし人は膝を開ひて座を讓づるに、式代もなく動乎と座り、虎髯左右に撫でゝじろり四邊を見廻し、おのが眞直に座りし人にはッたと眼を留めて鳴く牛の聲音太く、津田どの、和殿ハよき内室を持たれしよ、婚儀の過ぎた曉は詰の時刻に遲れぬやうにしやれ。大口豁乎と開いて座も動けと肩より震り下して笑ふ

を聞き兼ね佐久間どの不用ぬ配慮、この八彌を左程の呆痴と思ふてか。イヤ怒られな、呆痴と思ふ思はぬはともあれ、生若い和殿ゆへ七郎左衛門心附けまでに。と頬髯撫で丶空を向き天井の板數ふる憎らしさ。八彌賢しといへど若氣の奮怒押へ難く、聲清らかに、和殿などの差圖を受くる八彌にあらず、人に心附けする暇あらば、鈍き腕固めに太刀の振りざまにても試よ。涼しき眦に波を寄せて固き唇に莞爾と笑へば、圓らなる眼に角を立て丶、瞳子異樣の光を添へ、舌長し八彌、鈍き腕固めとは何ごと、餘人に對つての言辭なら知らず、この佐久間七郎左衛門には過ぎたり。已が土百姓より成り上りし身分も思はず、織田家の鬼と呼ばれし玄蕃信盛が弟に對つて、差圖を受けぬとは奇怪。七郎左衛門はこの御家のお附人なるを知らぬか。仁王坐らせしやうに肩肱張つて毒蛇の一と呑と、火鉢に被せかゝりながら云ふを、八彌は白齒顯はに片頬の靨の深淵へ沈め、知らぬにはあらず知りぬ、和殿の言ふごとく玄蕃どのこそ鬼神なれ、その弟も必らず鬼神か、片腹痛し、父が豪傑なれば子も亦豪傑と極りつるか、されば今この戰國の乱麻はあるまじ。虎の威を借りてこそ狐も強けれ。笑止、獨歩行しては小犬の牙にも尾を引くものを。と言ふ言辭切るゝか

切れぬに、七郎左エ門早や身躰四五分持ち上げ。默れ八彌、君の恩寵を頭にして出るまゝの過言、朋輩とは云へ格の違ふ七郎左衛門に言辭が過る。素つ首下げて罪謝れば許しもせん、さあくば刀は此處に。と大力左の手に取つて片膝立て、力を入れて鐺に疊とんと突けど少しも動かぬ八彌、和殿こそお附人の威光を笠に見過し難き日頃の專斷、己が素性に比べてこの八彌を土百性と迄に罵るその舌の根こそ過ぐれ。土百性にあれ非人にあれ、君の御用に立たば臣たる道は缺ぬものを、氏素性正しくば勤務に專横ありても忠臣といふや。この八彌は親こそ鋤鍬を握り土塊に手足を汚せ、忝なくも田の畔流るゝ小川に、小鮒せゝりの小童より君の見出し給ひて、今は老臣の尻に從ふ身、そを土百性と罵るは畢竟君の眼を盲目と云ふに同じ。如何にお附人とは云へ君の威を殺ぐ言辭を出すは、餘り臣たる道を存せぬ方法ならずや。土百姓にも劣りし胸の中、さる無法ものとは同席するも諱はし、この八彌が言ふは理に違ふか、和殿の罵るが道に合ふか、小首傾けてよく思うて見よ。　罵り返されて七郎左衛門、額際に太く顯はるゝ筋は汗を生み出し、いとゞ赤き顏に茜を加へ、身躰ぶる〳〵と動はせながら、重ねての不禮最早捨てがたし、腕鈍きか鈍くなきか、

七郎左衛門が三尺の魂、おのれ如き青侍の細腕に、やはか。鯉口ぷッつり切つて風起しながら起ち上り、今や秋水鞘を辷りて無反の稲妻晃き渡らんとするを、先刻より両人の問答に一言も挿まず、呼吸迄を殺して静まり返りし家臣の人々、この廣間に龍田の紅葉散らしては役目の落度、一人の身方も惜しき今戰國の世には、君の爲一方ならぬ損と云ひ合はさねど一齊に立ち上りて、斜に、躰を極めて仁王立に踏張りたる七郎左衛門が後より、金剛力を出して抱き止めたる一人、柄も砕けよと握る節瘤立ちし肱に、刀拔かせまじと取り付く一人、殘餘るものは口を揃へて慰めこしらへ、離せ、退け、只一ト打、不禮な八彌、眞二ツと眼血走らして虎髯逆立て、前へと踏み出す一ト足を寄集りて後へ二た足、行かじと爭ふ身躰を無理無躰に壓へ附けて、次第々々に次の間まで引き入れ、八彌の姿見せては靜まる心も狂ふ原因と、誰かの氣轉に襖〆切れば、北山下す一ト吹風の跡に落散る木の葉靜り、手に握りし刀おのが側へ靜かに置き、連れて行かれし七郎左衛門の跡を睨む八彌か苦笑ひの淋しさ。

文林

行路花　　黒田清綱

いく度か駒のあかきをとゝむらん
花さくころの志賀のやまこえ

待花　　師岡正胤

繪にかける櫻みてたにあくさまむ
まことの花のささそむるまて

籠坂懷古　　林甕臣

雨雲をはらひかねけんかごさかの
なごり寒けきゆふあらしかな

行路春雨　　三上一彦

音せねは雨ともわかすたかゆくの
霞みにぬるゝてゝちのみして

菊地武時か、元弘三年三月ばかり、北條英時か、はかたの陣にうちむかふをりから、ひたゝれの袖をたちきりて、妻子に贈りおきたるを娘の慈性尼といへるか、肥後國山鹿郡の日輪寺にをさめつゝといふなる、赤地錦のしたゝれの袖をみて、

佐々豐水

大きみにつくしつくしゝ眞こゝろは
赤きにしきのいろふかく見ゆ

かたみにとのこしおきけん袖の上に
わふるゝものはなみだなりけり

蛙　　花井魯禰

面白きさかりのはなのしたみづに
何うたかたとかはづなくらむ

本教道別之唱歌（承前）

藤原行麿

○博士はひろく和漢洋、古人のことを識ものゝや、それはど學者になる人は、天性別なる才智あり、農商工の實業に、精だす人はまた別ゝや、されども人は親の親、またそのおやの親の親、もとはたづねてしるべきじや、これを古典にたづぬれバ、三靈造化の神さまじや、みたまばかりで形なく、天地も人も萬物も、御造り出しなされしぞ、諸冊二神太祖より、詔命うけてかりそめに、ひとのかたちをなし玉ひ、先うみませるその國土、女人先言より成て、五大洲中國王に、その定めなき國となる、されば西洋各國に、男女同權てふ説は、土地にかなへる條理なり、わが皇國は左にあらず、女人先言不良とて、改言の後特別に、いつくり玉ひ東洋に、地位高尙の國なるは、地球定る其のちに、天孫降し玉ふため、こと改めてなしませる、ことゝうかゞひしられたり、されば顯界地球面、各國末世の總王は、わが天皇の外になし、皇御孫降臨まし〳〵て、六千年にちかき今、開明變化の時いたり、物理器械の巧みわざ、末にひらけて本に皈し、世界交通數千里も、日かず僅に航海し、辨理の事のおほきより、人心西に靡けども、改言國の日本は、抑成立の大初より、ひとりことなる國なれば、民權共和の歐風は、反對すべき條理な

り、人のからだは小天地、有餘不足の別われば、女は夫にしたがひて、家政をとりてうち〳〵の、ことをまもるが條理なり、大國主の妃神、誓ひ玉へる神がたり、わが大道の本教の、女鑑はこれとおもふべし、

○世界滿面その基は、わが日本の神々が、海外とはくいわたらし、漸次に開發まし丶なり、その原因にめぐりきて、から天竺のことのみか、いま丶た西洋各國の、事物わたりて用をなし、爲となると世におはし、これ原契の應報に、さることとなりとさとるべし、さて世の間は諾冊の、天頂地胎に引わかれ、生殺二氣の大元を、司どらせるものなれば、善惡得失反對に、かならず兩立しておこる醫術療藥ひらくれば、またかたはらに激症の、虎列刺邪疫のわたりきて、瞬時に人の命をとる、これ矛楯の世のたとへ、

野遊　林　甕臣

心しりの友、あながちに誘ひて、ゆるされねば、ゆくりなくも、閉ぢはてたる葎の門打つれだちて、出でぬ。けふは、きのふに似ず、日いとよく晴れて、林にさへづる鳥どもの聲も、こゝちよげなり。野ら、ゆけど心空にて、足つちにつかず。霞のうちに雲雀そこはかとなう打なきたり。

春の野のうかれごゝろのはてもなく
　　かすめる空になく雲雀かな

なは足に打まかせ、つゞら折りなる谷川堤の斷り岸を流れにつきて、登りつゝつたひ往くに、山の

たゞずまひ水の景色言ひしらねば、心とまり足はた、たゆきまゝに、岩根きりくひどもに尻かけて、いこひぬ。岩がくれの苔の筵にひさご、とり土器めぐらしぬるも、所がらきようありて、酔ひすゝましめたり。川のたぎつ瀬さくあだりに、あを浪を逆まき、岩に砕くる水の音、松風に響きあひたり。すゞろにもの凄く、眺めものに似ず。花さへ、をちこちに咲きみだれたり。

醉によくも似たる景色か醉だくみも
　ふみ手なぐべし春の山ぶみ

みな人「かれいひ、ものしたらんには、はとびぬべし」など、あなづりわらふも、をかし。なほゆきくて、野に出で、山に入り、谷にくだり、峯にのぼり、霞にまよひ、雲にまぎれづゝ、浮かれわりけど、日いまだ高し。醉ひごゝち、たゞならぬに、高うはなちあげて、山の鳥も、おどろかしてぞ、うたひけらく。

ゆけど／＼、雲雀なくなり
ゆけど／＼、花は咲きけり
ゆけど／＼、あかずも有るかな
ゆけど／＼、樂しきろかも
野に山に、この日暮らしつ
この日暮らしつ

すみれふみ櫻かざして野に山に
　あそぶ春にもなりにけるかな

とぢはてゝ葎が門に世をすてし
　こゝろがまへも打わすれつゝ

雜報

●「ありそ越ね、外ゆく波の、外心」其の德を恒にすともいへば、女のもつまじきは、げに、此の外心といふものなりかし。かばかりの道理は、言ふも今更のやうなれど、世には、とかく、この心にさそはるゝ者の折々見ゆるが心うさに、已むことを得ずてなむ。淺草あたりに住める三十餘なる女あり。その家富めりとにはあらねど、夫仕官の身にてありければ、賤しからぬ生活をなしたりき。さるに、一月の末つ方より、夫病の床に臥しぬ。この女、始めの程こそ、尋常なる看病もしたれ。その病の長びくまゝに、この頃になりては、早あき果てたる思ひにて、十一二ばかりなる男兒一人を家に殘して、自は、日毎のやうに、そこゝこと遊び步き、さて人にも言へるやう「あはれ、妾ばかり世に不幸なる者はあらじ。夫の健康なりし程は、萬心のまゝにふるまふ事の叶はざりしに、今は又、二月あまりの看病に、ほと〳〵困じはてつ。かくて夫の死りなむには、殘れる財產とて少かるべければ、行く先いと覺束なし。さりとて、改めて人に嫁かんとせば、一人の小兒のあるをいかにせむ。さばれ、我が身には代へ難ければ、今より、再、身のよすがを尋ぬるなり。かへす〳〵

も、小兒もちたる事のくやしさよ。せめてこれなくば、いかばかり自由なる事もなし得られなん」とて、きくさへ恐ろしき迄、かきくどきたりと、聞きつる人より傳へ聞きぬ。かゝる女は、今の世にも、稀に見るものなるべし。さるにても。昔の人は、標題の上句につぎて下句をば、我は思はじ。命死ぬとも、といへり。我が身を殺すに至るとも、外心をばもたじと誓ふまことの女は、今の世また幾人かあるべき。「ありそ越え、外ゆく波の、外心、我は思はゞ、命死ぬとも」是はこれ、女たらん者の恒德なるべきに、

●つばくらめ　の如くなるべし。燕の如くなるべからず。かくいはゞ、げに、聞こえぬことのやうなれど、そも亦故ありかし。この鳥、雌雄の中らひいと睦しきが上に、子を養ふさまの、いと順序正しきに、孃等が、常に見給ひし所ならむ。古の諺に、燕の子安貝てふ物持てりといふは、子を安らかに育すよりの事なるべし。子を安らかに育すは、女の最重き務なり。さればこそ、「如くなるべし」とはいひしなれ。又、ある地方にては言葉多き人を、燕の如しといひて、その人の字のやうにするなり。この鳥、その囀りの、とだえなくてかしましきが故なるべし。これ亦、孃等が、常に聞き給ひし所ならむ。言葉多きは、女の最愼むべきことなり。さればこそ、「如くなるべからず」とはいひしなれ。

●我が身　は我より愛する者はなかるべし。これ我が身の幸福ならむことを思ひて、みづから愛

するものあるべし。然るに、先、我身の上はさしおき、他に向ひて、我が身の幸福を求めむとする者の世におほきは何故ぞ。又、我が身を誡むること、我より勝りたるはなかるべし。故に我が身の過なからむことを願はし、みつから誡め愼まざるべからず。然るに、他の人に向ひては能く誡むれども、みづから愼しむ人の世に少なきは何故ぞ。女鑑愛讀の孃等にはさる人あるましけれども、至る處に此の類の人を見る。

●三省　昔、曾參と云ふ人は、日に三たび我が身を顧みると云へり。假令いかなる賢人、哲人と云へども、過つことなしとは云ひかたし。況や凡庸の人に於てをや。毎日我が身のなし行ひたることどもを顧みて、若しあしかりし事のありたらむには、速に改むれば、其の過は過にあらず。其れぞ眞の人の道なりける。世には過をしても、悪しき事と思ひても、人しらざればとて、其のまゝに打ち過ぐる人多し。人の知らざるは人の知らざるに非ず。返りて人はよく知れるなり。隠れたるより顯はるゝはなしと、古語にも云へり。かゝる人は、我が身を我が愛せざるなり。我が身を我が誡めざるなり。我既に我身を棄つ。人いかでか我が身を愛せむ。我も人も棄てたる身にいかで幸福の來るべき。世に愼しむべきは、自棄自暴なり。

●燈臺もとくらし　昔、さる所に、物覺よきをのこありけり。いづこの山なりけん。うち登りて山のかたち、立木のたゝずまひなどよく覺えて、人に語るは、かゝる峯にかゝる松のいくもとありて

その内に、かく枝たれたるあり。いまひときは高くそびへたるあり。そのかたへらに、槇の大きやかなるが、横ざまに生ひいでゝ、青かづらのかゝりたるありなど物語れば、いとこまやかに覺えたまふものかな、君か庭は、その山にならひて作りたまひしものなるべし。松のある中に、槇もみえたりしが、その姿はいかにありしか覺え給ふかと問へバ、その人吾が庭にも槇のありしや、否や、常見はべることなれば、確と覺え候はずと答へたりきとなん。自國のことをば得もしらで、外國の事を論らふ人、おのが心の正邪をばかへりみで、人のかたちの美醜を議するともがら、みあてのたぐひにこそ。

●成立學舍女子部にては、本月二日、淺草鷗遊館にて、第五紀年會、及、第四回卒業式を擧げたり。當日の來賓には松平子爵(信正)を始め、貴顯の人々無慮二百名餘もありこれに生徒、生徒の父兄、保證人等を加ふれは殆ト五百名近くの來會者にて、午後一時より式始りて、終は午後五時ありき。この間、祝辭、演説、唱歌、音樂等あり、近來流行の會とこと違ひ、いとおごそかなるがうちに、優にやさしきふし〴〵の見えたるはさすがに、ゆかしう思はれたり。當日、卒業證書を得たる人々は左のごとし。

本科

田中久遠子　長崎　　野口曾惠子　長崎
福木まさ子　東京　　進藤　孝子　山形
川島こと子　東京

撰科

修身、和漢學、英學、經濟、簿記
衛生、植物、裁縫、箏、和畫、　鎌田喬子　青森
和漢學、英學、畫學、　大給園子　東京
和漢學、英學、　大給竹子　東京

（已上廿四年十二月卒業の分）

本科

花岡梅子　群馬　海野きく子　京都
石川まさ子　東京　波岡しま子　岩手
水口光子　東京　酒井てる子　高知
鈴木久子　千葉

撰科

修身、禮式、和漢學、英學、
理科、衛生、經濟、裁縫、箏、　小林文子　靜岡
修身、和漢學、理科、經濟、　椎名操子　茨城
修身、和漢學、　松田しげ子　山口

（已上廿五年三月卒業の分）

をしへの庭

四月五日　兼題　待花

天

咲けはかつうつろふものと知りなから　木村彬香
しつこゝろなく花そまたるゝ

地

けふやさくあすや匂ふと此頃は　木村美津子
花にこゝろもうはのそらなり

人

待わふる花はあすもやほころひん　植木鋼子
おもへはうれし夜半の春雨

春雨の軒のしつくの絶え間なく　師岡須賀子
またるゝ物ハ櫻なりけり

よしの山また消えのこる泡雪を　松田　靜枝
花まつ身には花とこそみれ

今日も又はかなく雨となりにけり　江崎みさ子
花にまかひし峯のしら雪

うかれいてゝ今日も山路をたとけり　佐々有鄰子
わか待つ心花はしらすや

とぶ蝶のあとを追ひつゝゆくものは　下田花　子
花まつ頃のこゝろなりけり

ひと日をもちよふることく覺ゆるは　高井　孟子
花まつ頃の心なりけり

さけは又ちると思へはさくら花　師岡千代子
待たるゝ程ぞ樂しかりける

梅の花ちりにし日より山さくら　稻田　君子
匂はん時をまたぬ日そなき

朝なしそれかとまかふ白雲の　橋本數枝子
いつか櫻の花となるらん

待ちわふる心しらすや高砂の　新田　秀子
尾上の櫻はやもさかなん

四方山のけしきをあたに眺めつゝ　彌石　琴子
花の咲日をけふかあすかと

心あらは我につけなん山からす　稲木　稻子
み山櫻のさきのさかりを

うすかすみなひきそめにし朝より　西川とく子
梢にこゝろおかぬ日もなし

待花のさかんおもへははるさめの　廣田とめ子
つれ〳〵ふるもうれしかりけり

四月五日　兼題
野あそび
天　江崎みさ子

いふせくも、ながめくらしゝ、雨なごりなうはれて、霞に香ふ、朝日のかげなづかし。庭もせに、もえいでたる若草に、すみれの二つ三つ、うちましりたる見ても、野邊はいかにと、思ひやらるゝに、露をおびたる、花の梢になきわたる、鶯のこゑも、さそひかほなり。折しも、山里の友より、

もろともに去年もつみなるつほすみれ
をなし色香にさきぬるものを

梅なちねども、うときも人はといひおこせしに、俄かに思ひたちて、妹もろ共に、いで立ちぬ。やがてゆきつき見れは、物はかなげなる、小柴垣をめぐらさて、山吹の八重も一重も、打まぜて、うゑわたしたるが、いたく咲きみだれたり。前のかたは、目もはるに菜畑にして、今しも花のさかりなりけり。友人まちよろこびて、やがて三人うちつれて、後の岡にものしつ。見渡せば、いとひろやかなる野邊も、さながらすみれのいろなり。袖の下

よりたつひばりの、そら高くなきて、やがて霞にきゆるなど、いとをかし。ちりふかき都のうちに、すみなれし身には、いと目あたらしう、よはひものぶるこゝちして、わかず見てありしに、袖をひき動かして、などか、はやく摘み給ハぬと、おどろかされて、かへりみれば、妹は、はや、すみれあまたに、つはなゝど、ぬきそへもちたり。御髪ふさ〳〵として、うるはしき櫻重ねに、つやゝかなる帶、しどけなくしなし、二三人のはしために、かしづかれて、すみれつみ給ふは、こゝらあたりの別莊に、ものし給ふ姫君ならむ。ちゞれたる髪をあやしくゆひなし、裾みじかなる布子に、はゝせまきおびをしめて、やれたる竹籠を、たづさへ、流れにそひて、根芹つむは、里のをとめならむ。みなとり〴〵に、たのしげなり。われらも、やがて、すみれ、つくしなど、袖にあまるまでつみつ、常にはながき、春の日影も、いとゞみじかき、こゝちせられてなむ。

野あそひ

植木鋼子

世は春なからたれこめて、のみこもりをる折ふし親しき友の三人はかり、柴の戸に音つれて、かくのどかなる日をいたつらに暮さんは、いと惜う侍らずや近きあたりの野へをそゝろありきしたらんにはけうも有べし、打つれ給へといさなはるまゝに立出つ。　去年見てし枯野々原に引かへて、ひとつ色なる淺みどり、つはなにましる菫菜のこきゆかりさへなつかしく、花をたつねてことゝひ顔に鳴く鶯、いつれもをかしくあはれならぬはなし。うちしめりたる心もそゝろうきたちて、そこら生ふるさわらひを手折めつらしき小草のみをつみなとして、かたみに打けうじつゝかなたをみれは今を盛りの山櫻、野へのあるし顔に匂へる色もいと心にくかとその木の下にまとゐせむと思ふをりしもあれ山寺のかね遠くひゞき渡りめるに打ちおとろきて眺むれは、今まてうらになきて有し雲雀も、芝生の床にねぐらをいそき、遠近にたなひき渡す夕かすみは、家路をへたてたる心地して、

思ふとちあかぬこゝろにわくかれて
かへさ忘るゝ野邊の夕暮

なとくちすさみつゝ道にて友に引別れ、我家に歸りつきし頃は夕月の影ほの〳〵と窓にうつりぬるほどになん。

野あそひ

佐々有鄰子

心あひの友ふたり三人そゝのかしてかきろひのもゆる春日にうかれいてつゝこゝよけんがしこふさはしとつみはやすすみれつはなとり〳〵なるに菜の花かけの雉子のこゑかすみのをちの雲雀の高ねもとさらに今日はのとかにきこゆれは夕日のくたちもうちわすれたるに花や今よひのと一人かうたへるにおとろかされて家路をたとるもまたをかし

貴女之友

廣告

一廣嶋婦人會　本會ハ婦人ノ美徳ヲ保持スルヲ以テ目的トシ女禮式茶湯生花裁縫等ノ稽古ヲ爲シ傍ラ心得トナルヘキ演説談話等ヲ專ラ執行ス本會ハ明治廿一年二月創設シ以來毎月初日曜日ヲ以テ開會セリ今回更ニ歩ヲ進メテ左之通リ規程ヲ爲シ四月三日（初日曜）ヨリ實行ス可シ

一新ニ入會スル者ハ住所姓名ヲ記シ事務所ヘ申込アルベシ

一會員質素ヲ表スル爲衣服ハ綿服ヲ用ユ

一會日ハ毎月初日曜午后一時始メ五時ニ終ル

教科

教科	受持	
一演説		志熊直人
		河端守綱
一女禮式稽古	仝	高島ツル子
一和歌詠方教授	仝	三上一彦
一茶湯稽古	仝	高島ツル子
一生花稽古	仝	仝人
一裁縫斷形	仝	仝人
一女鑑講義		三上一彦
一機織講習		石本ウタ子

明治廿五年三月

廣島鉄砲町神道分局内ニテ

廣島婦人會事務處

和學女禮教授

一月　曜　日本語學

一火　曜　土佐日記講義

一木曜 水曜　源氏物語講義

一金　曜　女禮　並包結

一土曜 日曜　箏

右何れも午後第三時より第五時迄

外に和歌和文章添削

一束脩金五拾錢

一月謝一科金三十錢　二科以上廿五錢ツヽ

一寄宿生二人募集

但賄料一人に付一ヶ月金三圓

明治廿五年四月より

麻布我善坊町廿一番地

有住齊

精華第四號目次

（定價一冊五錢五厘 全國無逓送料）

女鑑第十一號目次

(遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麹町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領收證を要せらるゝ方ハ別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書ハ一切受取不申候事

女鑑

每月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
全國無遞送料
廣告料五號文字廿三字詰
一行十錢

明治廿五年三月十二日遞信省認可
明治廿五年四月四日印刷
同年同月五日出版

東京麹町區平川町五丁目十六番地
發行兼編輯人　西澤之助
同
印刷人　長屋基彦
同
發行所　國光社

(東京國光社印刷部印行)